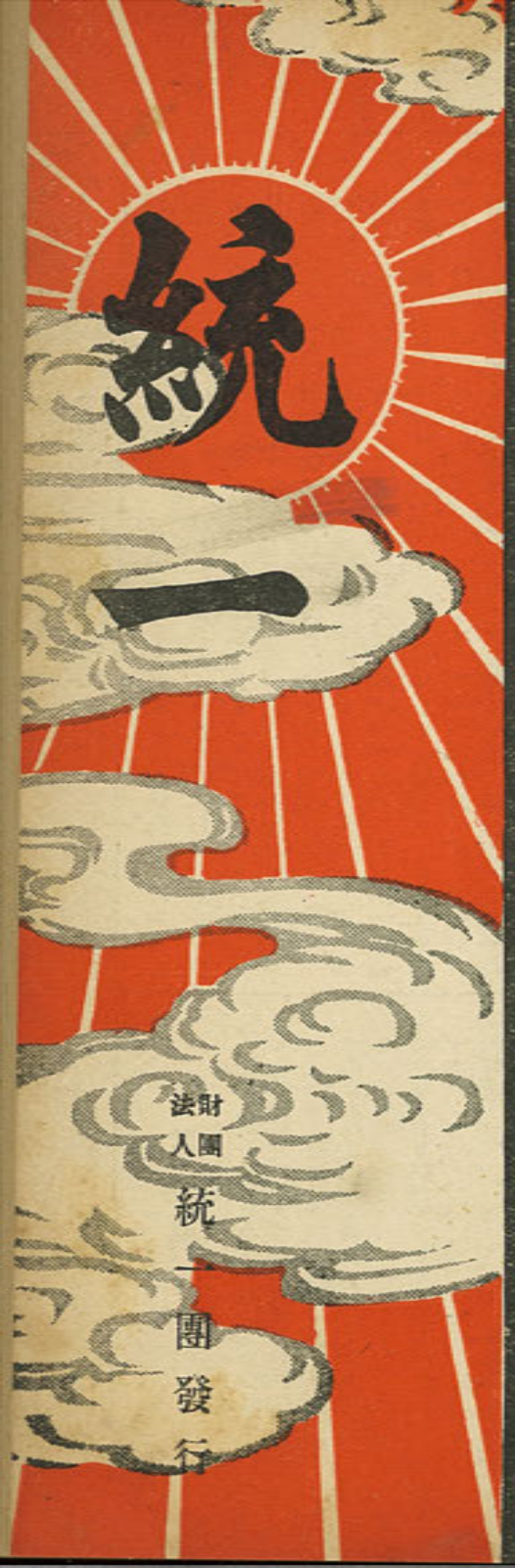


目次

佛教の根本と其の應用（其十三）……本多日生
開目鈔講話（第三十講）……小林一郎
我統一團の使命……河合陟明
武器なき戰士の歌……八木沼丈夫
近詠數首……大八木義雄
記事
○本部團報　講習會テキスト
○團費誌料寄附金及維持費領收
大藏經要義續篇（其十七）……本多日生

第四十四年九月號

14/10.3

財團法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ終來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ驀然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ淵邃　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ願望スル所ナリ

本團署則

◎目的　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根拠ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎維持員　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎贊助員　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎正團員　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラル、方ヲ正團員トス

◎入團　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎誌友　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

佛教の根本と其の應用（其十三）

本多日生

佛教の應用

本日は統一閣主催の立正大師六百四十五年の御會式を營むことになりまして、茲に法要竝に講演會を開いた次第であります。今日は日蓮聖人に關してその高德を宣揚するのが相應しき事と存じますが、しかし日蓮聖人の心血を濺いで爲されたる事柄に關して、その御精神の在る所を酌んで御話することも、是れ亦日蓮聖人に報ゆる所以であらうと思ふのであります。その日蓮聖人の努力せられた事柄は、いろいろ言ひ現し方もありませうが、一つは佛教の根本を明にして、さうしてその時と國とに適當したる應用を試みられたといふ事にならうと思ひます。過般來『佛教の根本と其の應用』といふ講題の下に數回の講演を續けて參りまして、今日はその應用の側に就てお話を申す順序になつて居りますので、その講題を繼續して、佛教の應用といふ事に就てお話して見ようと思ふのであります。

元來佛教は應用に富んで居るところの教で、卽ち方便隨宜と申して、その宜きに隨ふといふことは、或は時の宜きに、或は國の宜きに、あらゆる事情の宜しきに應じて適當したる教化を施して行くことを意味して居る。卽ちその應用の秀でて居る點に於ても佛教は特色を有つて居る次第である。さうして古來何れの高僧もその應用に努力せられた次第でありますが、殊に我が立正大師は應用の上に於ても洵に秀でたる活動をなされた方であつて、卽ち日蓮聖人の聖語を藉りて申せば、

法華經は一經なれども持つさまは種々なるべし。

と仰せられて、法華經そのものは一つのやうであるけれども、これを實際に應用して行く上に於ては、時と處と事情に依つていろ〳〵形が變つて來るのである。例へば紙といふ物の無い時代ならば、身の皮を剝いで紙に代へて法華經を寫して後代に傳へるといふことも非常な功德になるけれども、『國に紙充滿せんに皮を剝いで何かせん』と仰せられた、此點が日蓮聖人の特に秀でて居る所である。昔の人が手の皮を剝いで法華經を寫して功德を積んだからといつて、澤山紙のある今日に手の皮を剝いで、皺の寄つたやうな皮に僅かばかりのお經の字を書いて遺して見たところが何の益する所もないといふ風に、その實際に效果のある應用といふことに着目せられた點が、殊に日蓮主義の生命であると思ふのであります。

左樣に考へた時に、時代の推移變遷は激烈でありまして、今日要求されるところの佛教に對する應用はどういふものであるかと考へまするに、從來やり來つて居るところの佛教諸宗のやり方では、もはや時代に適せない事がだん〳〵あるやうに思はれるのである。日蓮門下の態度に於ても大いに覺醒をし、更に新たなる應用を試みなければならないのであらうと、私共には深く感ぜられる次第であります。左樣にすることに於て、それが眞に佛法を護る所以であるといふことは、本講の最初にも龍樹菩薩の說、天台智者の說を引用して證明をして置いたのであつて、唯だ在り來りの事をその儘正直に守つて行く態度のみが佛法を護る所以ではないのであつて、その時代の推移、その場合々々の必要に最もよく當てはまるやうに、成る程尊いものだ、有難いものだ、功驗の著しいものだといふことをアリ〳〵と示して行くことに依つて、世を救ひ人を導くことが出來る次第であるから、卽ちその應用を誤らぬやうにするといふことが非常に大事なことであらうと思ふ。

應用の邪正

涅槃經に、佛教の應用に就て最もわかりの良い話として斯ういふ話が出て居る。佛教の修行を積んで行く極く最初のところに、人間の身をあまりに大事に考へて、人間の肉體といふ云ふことにのみ心を囚はれて淸き精神の方に進むことの出來ないのが一般の凡情である。その場合に自分の肉身を反省して考へて見るといふと、人間といふものゝ肉體の內部はあまり美しいものではない、皮を一枚剝いで人間の內臟を考へて見た時に於ては、むしろ汚ないものであるといふことを考へさすところの不淨觀といふも

のがある。モウ一つは人間の心を落つける爲めに人間の呼吸を整へ、息を數へて精神の平靜統一をはかるところの數息觀といふものがある。この息を數へるところの數息觀と、自分の肉身の汚ないことを教へる不淨觀とに就いて、その應用を誤つた話が出て居る。或る佛弟子が、金師と申して金細工をする人間に對して不淨觀といふことを說いて、汚ないといふ事を考へることを勸めたところが、金細工師は毎日ピカ〳〵光つて居るところの綺麗な黃金ばかり扱つて居るものだから、少しも不淨といふことが考へられなかつた。一方に洗濯屋があつた。その洗濯屋に數息觀を教へた、所が洗濯屋はいくら息を數へて整へようとしても、力を出してゴシ〳〵洗濯をやらなければならぬから、どうしても息が整頓して來ない。そこで金細工師に教へた不淨觀も、洗濯屋に教へた數息觀も、どちらも效果が擧らなかつた、それからお釋迦樣の所に歸つて來てその話をしたところが、それはお前のやり方が反對である。逆に金細工をする者に數息觀を教へたならば、細かい細工をする時にはどうしても息を整へる必要があるのであるから、よく理解るだらう、又洗濯屋に不淨觀を教へたら、いつも汚れたシャツや褌のやうなものを洗ふ時分には、あゝ成程人間といふものは汚ないものだナといふことがよく理解るのだ、それを反對に金師に不淨觀を教へ、洗濯屋に數息觀を教へたからやり損うたのぢやと諭されたといふ話がある。このやり損ひは誰にでも直ぐわかるけれども、よく考へて見ると今日の日本佛教の大部分が、やはり洗濯屋に息を教へさするやうな事をやつて居るのと同じやうな失態に陷つて居りはせぬかと思ふのである。

祈禱主義の應用

それは大體に於て佛教の御利益を祈禱主義の方に力を入れ過ぎて居ることが、確に今後の佛教といふものに就ては多大な反省を要することである。信心をすれば御利益がある、御利益とは健康になる、金が儲かる、うまい事がある、斯ういふやうな考である、達者になるといふことも宜いけれども、それも普通に養生をして達者になるといふのでは信心のお蔭ではないのであつて、さん〳〵不養生をして病氣に罹らんならぬ苦であるのに罹らぬ、それが信心のお蔭ぢや、そこに特別の御利益がある、不味い物を食つてあまり養生もせんけれども體が肥つた、斯ういふやうな事を御利益と考へる。商賣の方にしても商賣に勤勉して其の方に一生懸命になつたから錢が儲かつた、それは信心の御利益ぢやない、當然である、それを少々へまをやつて、商賣の知識も努力も足らないのにうまく儲かつた、そこが信心のお蔭ぢやといふ。さういふやうな普通の知識、今日の常識に於て判斷して病氣に罹るべき者が罹らない、失敗すべき者が成功するといふやうな矛盾の事を、信仰に依つて救ひ濟すかの如き事を言ふのを、祈禱主義の應用と私は名けるのである。

さういふ事を今後の文化が開發進歩されて行く上に於ていつ迄もやつて居る人間は、先づ謂はゞ開けない人間、愚かな人間、わからぬ人間といふことに符牒を附けられても一言も無いことであらうと思

ふ。そのわからぬ者を集めて、その中の隊長になつて佛教が騒いで居るとすれば、佛教は世の中をわからぬ方に導く文化の敵であるといふ非難を受けても辭することは出來ないであらうと思ふ。信仰の上から御利益を得るにしても、さういふ拙な、今日の文化が認めないやうな説明方法――應用といふものを全廢することが何よりも緊切なことである。

未來主義の應用

又モウ一つは死んでから佛に成るといふことでありますが、無論佛教は成佛を目的にするのであるけれども、この世に就いて教ふる所なく、この世から進んで行くべき順序を考へずして、この世などはどうでも宜い、佛法といふものはナニも此の世の事ではないのだ、此の世はまアどうにか斯うにかやつて行けば宜い、雨降らば降れ、風吹かば吹け、頬冠りして通れば宜いぢやないか、併し死んだ將來は永い、その死んだ將來はドウしても佛樣に救つて貰はなければならぬのぢやというて、所謂未來觀に餅したところの利益になつて居る。佛法は死んでから役立つものぢやといふので、ふだん日頃はちつともお寺に來んけれども、死んだら一番に自轉車でお寺に駈けつける、『とう〳〵親父も死にました、どうか葬式を賴みます』『さうか、實は大きに待つて居た』……お寺の方でも坊主は法事と葬式以外には何も用は無いと考へて居る。今日でも全國十數萬の坊さんの多數の仕事といふものは、前に申す常識に反したる祈禱主義と、未來觀に餅したるところの葬式と法事とを以つて生活をして行く。それが佛教だといふやうなことでは、最早や今後の文化の中に置き去にされてしまふところの過去の遺物であるといふことは明瞭な事である。左樣な事をして居つては行き詰つてしまふ、即ち佛教徒は自から墓穴を掘つて、その中に入つて行く支度をし居るといふやうな批評を世の中から受けても、それは否むことは出來ないと私には思はれるのである。

眞實の應用

そこでいろ〳〵從來のやり方の間違ひは多いけれども、最も大きなものはこの誤つた祈禱主義である――勿論祈禱主義が絶對に惡いと言ふのではない、宗教の祈禱は神聖なるものとして、如何なる文化の中にも如何なる進歩した世の中にも認めらるべき正々堂々たる宗教の祈願といふものはあるけれども、今言ふやうな誤つた祈禱主義を私は排斥するのである。未來の大切といふことも宗教としては大事な事柄に違ひないけれども、その説き方や遣り方に非常な間違ひがあるのである。吾々の永遠の生命に關する所の成佛得脱といふことは、法華經に於ても日蓮主義に於ても、佛教全體に通じて大事な事であることは言ふ迄もないのである。とかく坊さんでも一般の人間でもあたまが小さい、三角あたまと言ふか、鉛筆の尖のやうなあたまで、何か一つ考へるとモウそれだけしか考へることが出來ない、『私は御祈禱で

病氣が蔓りました、それで信心して居ります」……などと言つて、病氣に罹らぬ事だけが佛教の信心だと思つて居る、さういふ錐の尖みたやうな考ではいかん、圓滿珠の如き信仰を佛教は要求するのであると思ふのである　いろ〳〵過去の弊害に於ては非難すべき事は多いと思ひますが、まアそれ等の事は一括して從來のやり方では最早や時代の要求に副はぬことが多々あるといふことに結んで置いて、然らば今後に對するにはどうしたら宜いかといふ、大切な實際問題のお話を進めて見たいと思ふのである。

之に就ても小さく算へれば限りなく時代の要求はありますけれども、成べく根本の問題に、さうしてそれ一つが澤山の問題を包括するやうな意味合に於てお話をして見たいと思ふのであります。

佛教の任務

さうすると今日の世の中を救ふ、或は人を濟ふといふことの一番大きな役目といふものは、この人間の考、知識に關するところの缺點であります、無論人間は教育を受け、學問をし、益々知識を啓發して行かなければならない、人類の文明といふものは或る意味から言へば人間が賢くなるといふ言葉で現はされるほど、人間の知識人間の理解といふものは大切なものであります。ところがこの進めて行くべき人智といふものゝ上に病氣が附いて居るのが、今日の一番大きな問題である。無論益々學問をし、益々賢くして行かなければならぬから、諸君の子供さん達もみな毎日學校へやつて居られるでせう、七つ八つの時分から學校へ行き始めて二十五、二十八になるまで毎日〳〵降つても照つても學校へ通つて居るのである。さうして卒業して出て來るといふと、これが變な病氣を持つて居る。どうも安心ならぬといふやうな者が澤山その中から出て來るのである。これはどういふものであるか、一概に安心ならぬといふて、不良少年になるとか、左傾派になるとか、泥棒になるとかいふことを言ふのではない、大體に於て今日一般の知識といふものゝ上に多大な弊害が生じて居るのである、それ故に知識が世を毒するといふことが澤山に起つて來る。それが社會問題にも現はれ、政治問題にも現はれ、世の中のあらゆる事柄に現はれて來て居るのである。即ち人間の知識が正當に働いて居らないことであります。是は私が言ふ迄もなく大正十二年の認書に明瞭にその事をお示しなされて居るので

> 輓近學術益々開ケ人智日ニ進ム、然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ、輕佻詭激ノ風モ亦生ス、今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスンハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル。

と仰せられたのは、今日の時弊中に於て最もこの學問知識に附隨いて居る病弊が恐ろしいといふことを宣はせられて居る次第であります。これは實に困つたことで、學問させんければ人間は馬鹿である、馬鹿ほど怖いものはないし、學問すれば浮華放縱の習、輕佻詭激の風が生ずるといふやうな事では、進むも不可、退くも不可、どうすることも出來ない、進退維れ谷まる、日本の文明の前途はモウ致し方がな

い、絶望といふことに相成る次第である。どうしても是は學問を進めて行くと共に、その弊害を切つて捨てるところの方法を講じなければならぬ、それを擔任する所の任務が佛教であると私は斷言するのである。

人間の稟性は、由來財色の欲、卽ち物質的欲望に馳せんとする傾向を有す。道の爲にする犧牲的精神の如きは、之を修養教化の力に待たざるべからず。而して道義的批判を重んじ、社會的風潮を高め、道を重んじて精神的文明を本位とし、以て一切の施設を爲すにあらずんば、普天の民何ぞ道の爲に盡すものあらんや。故に永遠に亘りて如何なる時代にも、如何なる邦國にも、この第一義を嚴守し、こゝに文明の理想を正し、こゝに國家の施設を導かずんばあらず

——本多上人——

開目鈔講話

（第三十講）

小林一郎

この問は、いろ〳〵な宗派の人々の考が、法華經に對する解釋を誤つて居るといふことを一通り擧げられて、それから尙ほこの法華經を弘めるに就ての覺悟を說かれる譯でありますが、そのいろ〳〵な宗派の中で、法相宗といふ宗派がどういふ考を有つて居るかといふ所までを讀んで居りました。今日はそれに續いて三論宗、眞言宗などの批評に移るのであります。

三論の吉藏等讀て云、般若經と法華經とは、名異體同二經一法なり。

三論宗といふのは日本にも、奈良朝の時代に傳はつたのでありますが、その後殆ど勢力が無くなりまして今では宗教として活動して居ないのでありますから、マアこの批評などは、今の吾々には殆ど無關係のやうなことでありますけれども、併し昔はなかなかこの三論宗といふのも勢力がありまして、一時は隨分榮えたものであります。殊に支那の唐の時代にはこの宗派が大分盛でありました。

その三論宗の中で殊に有力な人は吉藏といふ人でありますが、その吉藏の考に依れば、般若經と法華經とは、名は異ふけれどもその內容は一つだ、斯う言ふ。この三論宗といふ宗旨は、大體に於て佛教全體を大きく二つに分けまして、今の言葉で言へばマ

ア小乘と大乘と言ふのでありますが、その宗の言ひ方では

聲聞乘
菩薩乘

と言つて居ります。『聲聞乘』といふのは、マア別の言葉で言へば小乘の教、卽ち世の中を離れた、世間の煩惱の生活を離れた淸淨な生活をすることを主として教へるもの、それから『菩薩乘』といふのは、慈悲の心持を以て一切の人に對して、世の中の苦んで居る者、惱んで居る者も救ふことを主にする。斯ういふので大體佛教を二つに分けて居るのであります。さういふやうに二つに分けて見ますと、般若經といふものも大乘の經典であるし、法華經といふものも大乘の經典であるから、內容は大體同じだ、斯ういふ大ざつぱの議論をして居るのであります。

善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏等讀で云、大日經と法華經とは理同じ、同く六難の內の經也。日本の弘法讀で云、大日經は六難九易の內にあらず。大日經は釋迦所說の一切經の外、法身大日如來の所說也。又或人云、華嚴經は報身如來の所說、六難九易の內にはあらず。此四宗の元祖等かやうに讀みければ、其流をくむ數千の學徒等も、又此見をいでず。

それから又今度は眞言宗を支那の唐の時代に弘めた善無畏、金剛智、不空、これは三人共印度の人で、一番先は善無畏といふ人が支那に渡りまして眞言宗を弘めて、それから續いて金剛智、不空の二人が一緒に來た。不空といふのは金剛智の弟子でありますけれども、弟子と言つても、師匠に殆ど負けない位な研究を積んだ人であります。この二人が後から續いて來て、都合三人の人が力を協せて眞言宗を弘めたものでありますから、支那の唐の時代に於ては、眞言宗といふものは非常に盛になつた譯であります。

ところがこの眞言宗といふものは一種不思議な宗旨であつて、お釋迦樣が御入滅になりまして八百年經つてから、南の印度の或る所に鐵の塔があつて、その鐵の塔は昔から誰も開けた者は無かつた。これを龍樹といふ人が行つて、その內から取出したのが眞言宗の初めだと、お經にマア傳はつて居るのであります。一種不思議な言傳へでありますが、さういふ不思議な言傳へがどうして起つたかといふことを今の私共の考へで考へて見たのでありますが、私共は大體斯う思ふのであります。

北印度	中印度
	南印度

印度といふ國はこんな四角な形のものではありませぬが、印度全體といふものを分けて見ると三つに分れる。この北と中央とのまん中に、例のヒマラヤ山といふ山がある譯です。それで佛教といふものはヒマラヤ山の南の方に始まつて、これが中印度に廣く弘まつたのであります。お釋迦樣の御降誕になつた所はヒマラヤ山の麓でありまして、中印度の此の方に寄つた所であります。この所は氣候も風土も非常に好くて、これは印度でも一番好い所であります。

私もその近邊まで行つて來たのでありますが、印度といふ所は夏冬通じて暑くて、皆黑ん坊だらうと誰も思ふが、決してそんなものではないのであります。尤も南印度の方はこれは年中夏であります、十月でも十一月でもやはり夏服を着て居ります。春もなければ秋もない無論冬もないのでありますが、中印度に行きますと、モウそんなことはない。殊にこのヒマラヤ山の麓へ行きますと、マア雪は降らぬけれども、日本で言ふと十一月の末の氣候ぐらゐにま

でなりまして、かなり寒くなる。私はちやうど十二月の初めに中印度のダージリンといふ所へ行つたのでありますが、その頃は氣候も大分――寒いといふ程ではないけれども、マア今の四月頃のやうな陽氣で、六十度が七十度ぐらゐで、夜になると大分冷えまして、部屋の内で火が無くてはチョット淋しいくらゐで、ホテルに泊るとボーイがやつて來てストーブに石炭をくべて呉れる。印度でストーブにあたらうとは思はなかつたが、やはり中印度あたりに行きますと、雪は年中降らぬと言ひますけれども、日本の十一月頃の紅葉の散る頃の氣候になる。夏の盛りには隨分暑いのですが、私は夏は知りませぬけれども、北印度に行くとモット寒いさうであります。私は印度は年中夏だといふのに、お釈迦様の傳記を見ると、冬の初めに、着物が薄くて寒くて困つたと書いてある、變なことだと思つて居ましたが、行つて見ると不思議はない、兎に角日本の十一月の末ぐらゐの氣候になりますから、そこで薄い着物を着て居られたものだから、夜などは隨分寒くてお困りになつたに相違ない。同じ印度と申しましても、氣候風土がそんなにも異ふのでありますから、それで又人間の樣子も異ふ。南の方へ行けばまッ黑であります。昔の冗談の話に、人間が向ふからこつちへ歩いて來るのか、向ふへ歩いて行くのか判らぬと言つたといふ話がある。まさかそれ程でもないが、實際顏の色も髪の色も同じ黑ん坊がありまして、遠くから歩いて來たら、どつちに歩いて行くのか知れないくらゐであります。そのくらゐに南印度の方はなか〳〵暑く、又人の色も黑いのでありますが、此の方に行くに隨つて、氣候も好くなれば人間の色もなか〳〵白い。西北の方にインダス川といふ川があつて、そのインダス川の上流の方から入つて來た人種がなか〳〵優秀な人種でありまして、お釈迦様もこの人種の中からお生れになつたのでありますが、こ

れは歐羅巴人の言ふアリアン人種といふもので、非常に優秀な人種であります。この人種は色もさう黑くない。あなた方も御承知の方があるかも知れませぬが、日本にもタゴールといふ印度人が來ましたがあの人などは色は吾々より白い、これが印度人かと思ふやうなのが居るのであります。それでヒマラヤ山の麓邊へ行つて見ますと、やはり色の白い上品な人間が居る。私共子供の時に冗談に、印度人は色の黑いのが美しいのだといふことを聞いたものでありますが、そんなことはありません。やはり實際その邊へ行つて見ると白い方が宜い、婦人なども實に美しい婦人が居る。實際ヒマラヤ山の南の方へ行つて見ますと、日本人とさう顏つきも變りはしない。ナニも黑いのが宜い譯でもなんでもない、氣候も好いし、人間も決して黑ん坊ではない、上品なものであります。

此處に發達したものが佛教でありまして、要するにこのヒマラヤ山の南の方にネパールといふ高原があります。其處はちやうど日本の輕井澤のやうな所ですが、其處へお釈迦様の教が弘まつた。さうしてだん〳〵と南の方に及んで行つて、中印度全體に弘まつたのであります。その弘まつたのはお釈迦様の御入滅になつた後八百年の間にズッと弘まつた。それから後にこの南の方の印度に、今の眞言宗で言ふところの大日經といふものがその鐵の塔の内から見出された。斯う傳つて居るのでありますが、マア察する所、南印度の方にさういふ宗教が佛教と別に發達したのであらうかと、マア私などは思ふのであります。それが佛教がだん〳〵盛になつて來て、南の方に弘まつたものであるから、逆も佛教に敵することが出來なくなつて、南の方へ弘まつた一つの宗派が佛教にマア併合されたやうな形である。それが今の眞言宗といふものの初めである。斯ういふ風にマア思はれるのでありますが、その源は異ふのだら

うと思ふ。實はこんな事を言ふのはチト大膽過ぎる言ひ方でありますが、いろ〳〵この眞言宗の大日經とか、蘇悉地經とか、金剛頂經といふやうなお經を讀んで見ますと、法華經とか華嚴經とかいふやうな經典とは餘程違ふのであります。マア第一お經の中に佛樣を祀るとか、佛樣を祈る方法などを說いて居るお經といふものは、眞言のお經より以外には斷じてない。法華經だつて、華嚴經だつて、涅槃經だつて、佛樣を祀るには斯ういふ風にして祀れとか、斯ういふ儀式を備へて祀れとかいふそんなことはないでせう。ところが眞言宗の方へ行くと、大日經でも蘇悉地經でもそれが主になつて居る。壇も斯ういふ風に作つて、斯ういふ儀式をして佛樣を祀れば佛樣が護つて下さるといふことを主に書いてある。お經の大部分はそれであります。これは他のお經とまるで樣子が異ふのであります。それであゝいふのが南の印度に發達した一つの特殊の宗教であつたのだらうと思ふのです。それがだん〳〵南印度に弘まつた所に、中印度の方から佛教が弘まつて來て、結局これが合流して一つになつたものだ。斯う思へば、佛教の中にあゝいふ一種不思議なものがあるといふことは納得が行くのであります。これはまだ想像でありますから、さう斷言して宜いかどうか判りませぬが、どうも私にはさう思はれる。それだから日蓮聖人のやうな非常に勝れた頭腦を有つて居る方が、眞言宗の經典を讀んだ時に、これはお釋迦樣の敎とは異ふ、こんなものを弘めた日にはお釋迦樣の敎は滅茶々々になつてしまふといふことを感ぜられたといふことは當然だと思ふ。又さうあるべきであります。

それでありますから、眞言に於てもこれは大變な問題だらうと思ふのです。今では日本でも眞言宗といふものは相當な勢力を有つて居りますが、將來この眞言宗といふものと、他の大乘の佛教との關係

といふものは、兩方が眞面目になれば、隨分面倒が起ると思ふのです。今の所では兩方がいゝ加減な事をして妥協して居りますから、それで濟んで居りますけれども、兩方が眞面目になれば、あの眞言宗といふものは他の大乘の佛教と、たゞいゝ加減に仲好くして濟ますべき問題ではない。マア小さい問題は爭ふには及ばぬけれども、さういふ敎義の根本の異ふものが、いつまでも手を携へて行けるかといふことは、チョット私共見込みが附かないのであります。併ながらこれも佛教の內に入つて後、既に千何年も經つて居るのでありますから、だん〳〵融和して居りますけれども、能く經典を讀んで見ますと、お經の大體の樣子がさういふ風に異ふのであります。

それだからこの眞言宗の方では、お釋迦樣を重んじないで、大日如來を重んずる。今の大日經でも、蘇悉地經でも、金剛頂經でも、お釋迦樣といふものは出て來ない。淨土の方では阿彌陀樣を言ふけれども、併し無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經を讀んで見ると、お釋迦樣が出て來る、お釋迦樣が阿彌陀樣を說いて居るといふ形になつて居る。ところが眞言宗の方はお釋迦樣が出て來ない。大日如來といふ佛樣が出て來て、その大日如來が敎を說く、斯ういふ形になつて居るのでありまして、眞言宗の經典に於てはお釋迦樣とチョットも緣が無い。今では無理にお釋迦樣の佛教とくつ附けて、一緒にしてやつて居るけれども、これはチョット妥協とも言ふべきものであつて、眞面目に經典を讀んで行けば、どうして一緒にやつて行けるのだか、不思議に思はれる。印度にはさういふ一種特別のものがある。併し眞言の經典を讀んで見ると、隨分深い事も說いて居りますし、又宗教として決して價値の無いといふ譯ではありません。隨分立派なものでありますけれども、併し他の佛教と一緒にして、似たやうなものと

して弘めるといふことはこれは筋が立たないと思ふ。あれを弘めるなら弘めるとして、あゝいふ大日經といふもので獨立したものとして弘めなければならぬ、又それで筋が立つと思ふのでありますが、他の佛教と妥協してやるといふことは、どうも何だか世の中を少し騙して居るやうな氣がするのであります。惡口を言ふやうでありますけれども、さういふやうな氣がするのであります。隨つて眞言の方ではどうしても御祈禱本位になります。經典にさういふ風になつて居るのでありますから、大日經でも大部分は佛樣をお祀りすることばかりである。佛樣のお祀りをすることは加持を求めるといふことであります。眞言の方では加持を求めるといふことが大事です。佛樣の力が加つて、さうして善い行ひが出來て來る。佛樣の加持を求める、どうぞお助け下さい、私に力を副へて下さいといふことが主になつて居る。だからあゝいふのはチョット法華經とは兩立しない。法華經に於ても無論佛樣の力を乞ふのだけれども、法華經の方は感應であります。こちらが骨を折ると、その骨折りに對して佛樣の力が加はるのだ。自分が骨折らずにたゞ佛樣にお委せ申して『何とかして下さい』といふことは、それは法華經の何處にもない。さういふのとは大分異ふ。これは將來に於て佛教を本當に眞面目に研究する場合に於ては問題になることと思はれる。日蓮上人は別にさう歴史的の研究をなさらなかつたけれども、隨分頭腦の良い方でありますから、經典を讀むのだつて、『これは違ふナ、斯ういふものはお釋迦樣の一生懸命にお說きになつたお經といふものと並び立つべきものでない』といふことを見極められたのであらうと思はれます。

兎に角さういふやうな譯でありまして、眞言宗の方では、お釋迦樣といふものは要するに大日如來といふ佛樣が假にこの娑婆世界に身を現はしたものであるといふ風に解釋を致しまして、さうしてお釋迦樣のお說きになつたことは、顯教である、大日如來のお說きになつたことは密教である。斯ういふ風に所謂『顯密』といふことを分ける。『密』といふのは秘密といふので、秘密といふのは隱して置くといふ意味ではなくて、奥深いといふ意味。お釋迦樣のは幾ら何と言つてもまだ〳〵淺い、例へば法華經と雖もまだ〳〵淺い。併ながら大日如來といふものはこれは根本の佛樣だから、お釋迦樣だつてやはり大日如來の現れたものに外ならぬのだから、大日如來のお說きになることが本當に深いのだ、お釋迦樣のお說きになつた事の中でどれが方便だとか、どれが眞實だとか申して見ても、迚もこれは大日如來に敵はない、だから大日如來の教が密教だと言ふのであります。

併ながらこの善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏といふやうな人は、さういふ意氣込を以て支那へやつて來た。一番初めは何しろどうも大日如來を中心とした教といふものは非常に勝れて居るから、これを一つ支那に弘めてやらう。支那にはまだ斯ういふ教が弘まつて居らないだらうから、これを持つて行けばお釋迦樣の教ナンといふものは迚も敵ふものでないといふくらゐの意氣込で、この人々が支那へやつて來た。そこで一體支那には何が弘まつて居るかといふことを、マア一通り研究しないといけないから、支那に弘まつて居る佛教を一通り檢べて見た。さうして驚いたといふのは、前から幾度も申すやうに、天台大師といふ方が、唐の時代よりモット前の陳、隋の時代に出て、法華經を中心として教を弘めて居らつしやる。唐の時代には天台大師のお書きになつたものが世の中に弘まつて居る譯でありますから、それを今の善無畏、金剛智、不空といふやうな人がいろ〳〵檢べて見ると、これはどうも非常に理論の整然とした、洵に深いものであつて、これを向

ふに廻して競爭をしても迚も敵ひはしない、斯う氣が附いた。これは思ひ懸けないことである。支那人は碌なものではない、支那に弘まつて居る佛教は多寡が知れたものだと思つて行つて見たところが、どうして素晴らしいものがある、これを敵にしてこの眞言宗を弘めたつて弘まりはしないと氣が附いた。そこで妥協をやつて、こゝに書いてありますやうに、同じだ、それは法華經といふものも良いものだ、法華經の中に說いてあることと、自分達が今ここで弘めようとする大日經とは優劣がないのだ、何れも深い事を說いて居るものだから、これは理論としては同じだ、斯う言つてこの大日經を弘めることをやつたのであります。流石に智慧の有る人でありますから、なか〳〵うまい所に眼を着けたものであります。

ところがさういふ風に理は同じだと言つても、全く同じだといふのでは、それなら新に弘める甲斐はないのだから、そこで又理窟を附けて、成程それは内に說いてある教は同じだけれども、法華經を讀んで見ても、法華經の教といふものの尊いといふことは解つても、そんな理論ばかり研究して居られない人はどうするか。天台大師の言ふ一念三千といふやうな、そんな難かしい研究をして居る暇のある人ばかりはありはしない。又學問もなければ智慧も無い者は、そんなことは解らないから、何とかそんな難かしい理論などを研究しなくても、佛樣に依つて救はれるといふ道がなければ困るぢやないか。それはどうも法華經の中にもそんな事は無いし、天台大師もさういふことは言つて居ない。ところが自分の方にはそれがある、それはどういふのだといふと、口に眞言を唱へるといふこと、『眞言』といふのは隨分短い言葉でありますが、これを唱へて、手に印を結ぶ。『印』といふのは佛樣は印を結んで居らつしやる、その佛樣の通りに印を結び、口に眞言を唱へるといふことで以て、難かしい理論を研究しなくても、佛樣のお心持と通ひ合ふことが出來る。こつちは理論なら理論で宜いのだけれども理論が要らないといふ時には、印を結び、眞言を唱へさへすればその形で以て佛樣と通ひ合ふことが出來る、これより外にない。まだ天台大師も斯ういふ事を言つて居ない、この點に於てこつちは上手だ、斯ういふ事を考へ出した譯であります。『法華經と同じだ』、斯う言つて油斷さして置いて、さうして『併ながらその實行の方はこつちが上だ』、斯う言ふのでありますから、實に巧みな教へ方だと言はなければならぬ譯でせう。

それで眞言宗の方では、法華經や何かに對して、『理同事勝』といふことを言ふ。『事』といふのは實行の方法、理窟は同じだ、法華經を讀んでも大日經を讀んでも、大體の理窟は同じだけれども、併ながらその法華經を讀んだのではどうしても實行する方法が立つて來ない。自分の方では口に眞言を唱へ、手に印を結ぶといふことに依つて、佛樣とおかに通ひ合ふといふことになるから、『事』、卽ち實行方法の方は自分達の方が勝つて居る。斯ういふのであります。日本の弘法大師なども頻に理同事勝といふことを言つたものであります。これは決して排斥すべき議論ではないのであつて、尤もな點もあるのでありまして、確にその通りであります。たゞ理論の研究ばかりして居たのでは、理論を研究する暇の無い人は――世間の大部分の人がさうですが、法華經を讀んで、法華經の一字一句を一々詮索して居るといふ暇のある人は幾人もありはしません。一念三千といふその言葉さへ解らないのでありますから、成程眞言の人の言ふ通り、理論だけではいけない、理論を學ばなくても、佛樣のお心持と自分のお心持と通ひ合ふやうな道が開けて居なければ、宗教としては完全なものでないといふ議論は尤もであります。

そこに眼を着けられたのが日蓮聖人であります。日蓮上人はその點を認められた。確に理論ばかりではいけない。併ながら大日如來を中心として眞言を唱へ、印を結んだのでは駄目だ。何故なら、大日如來といふのは、法華經の本門の壽量品にあるところの本佛といふものとは違ふから、本佛といふものほど深く考へて居ないのだから、大日如來の考へ方といふものではいけない、本尊がしつかりして居なければならぬ。眞言の方で言ふ印を結び眞言を唱へるといふやうな方法は、適切な方法ナンだけれども、一體どの佛を相手にして祈るか、どの佛を相手にして賴むかといふ時に、大日如來といふものの說明の仕方はまだ足りない所がある。卽ち法華經の壽量品に現れた本佛といふものは、モット根本でモット深いのだから、法華經の本門にある本佛といふものを本尊に立てゝ、さうして必しも理論の研究はしなくても、直に佛のお心持と通ひ合ふやうな道を拓かなければならぬ。これが一番良い道だといふことが、日蓮上人のこの『妙法蓮華經』の五字に一切を包んだ題目を唱へることに依つて救はれるといふ教になつた、この道はそれナンであります。だから日蓮上人がそこを考へられたに就ては、眞言の方の理同事勝の說といふものが一種の參考になつたといふことは、これは否定は出來ません。日蓮宗の人などは動もすると『ナーニ眞言の厄介になるものか』といふので直ぐに喧嘩腰になるが、これはいけない。日蓮上人のお書きになつた曼荼羅でも、眞言の不動、愛染といふものが取入れられて居る。これは他の勝れたものを取入れ、他の善い所を入れたといふことは少しも差支ないと私共は思ふ。そこで日蓮上人も、理同事勝といふことにヒントを得られたといふことは確かだと思ふ。そこで日蓮上人も、法華經を讀誦して一念三千といふやうな理窟ばかりをやつて居つたのではいかぬ。全體を妙法の五字に籠めて、

これを心から口に唱へ心に信ずれば、縱ひ理論の研究をしなくても佛と通ひ合ふやうな道を拓かなければならぬといふことを見極められたといふことは、總ての人を信仰の道に入れる上に於て極めて大事なことであつたのであります。

斯ういふ風にマア私共としては解釋して居るのであります。無論眞言宗に比べれば、天台大師の教は勝れて居る譯でありますけれども、さう一々天台の教を研究しなければ信仰が立たぬといふのでは、それは特殊の人達のみに限られたものでありますから、それで日蓮上人の仰しやつたやうに、所謂哲學上の理論を持つて來れば、どんな難かしい問題だつて幾らでも解決の出來るやうな深い根抵はありますけれども、併し又さういふ理論的の研究をする必要のない者は、妙法蓮華經の五字を唱へることに依つて、直に自分の心と佛の力と通ひ合ふやうな道が拓かれて居るといふことが非常に善いことである。マア大變いろ〳〵な問題に觸れて來ましたが、大體さういふやうなことであります。

それで眞言宗が弘まるに就ては、今申したやうな事情から、理論としては法華經と同じだ、斯う申しました。さうして實行方法に於て自分の方は勝れて居るといふ議論をして居るのであります。だからここでも大日經と法華經とは理窟は同じだ、やはり『六難』の内に入る。難かしい方の教、深い方の教だ、決して淺薄なものではないといふことを言つて居る。

ところが日本の弘法大師が言ふのに、大日經は六難九易の内でない。六難九易といふことは法華經に就いて言ふのだから、大日如來のお說きになつた教といふものは、お釋迦樣の教よりモウ一段上のものだから、六難九易といふ中に入らない、『大日經は釋迦所說の一切經の外、法身大日如來の所說也』法身といふのは永い生命を有つて、永遠に世の中に滅

びないで永く存在して居らつしやる佛といふ意味に於て、法身といふ字を使つて居る、その法身の大日如來の說である。だからこの眞言宗で立てゝ居るところの、大日如來を中心とする信仰といふものが一番上だ、斯う申すのであります。

『又或人云』眞言宗の中でも或る學者が言ふには、華嚴經もやはり法華經より一段上だ、何故ならば華嚴經は報身如來の說である。報身といふのは佛の智慧といふのであつて、幾度も申すやうに報といふのは『むくひ』といふ字である、永い間の修行を積んだ結果として絕大なる智慧を具へたといふ意味で、報身と申すのであります。その華嚴經といふものは報身如來、智慧の化身と仰がれる佛樣の仰やつたことである。だからお釋迦樣よりモウ一段上の方であるのだから、お釋迦樣の敎の中で六難九易といふ區別を立てる以上は、その六難九易といふものと華嚴經と一緒に考へる譯には行かない。華嚴經は毘盧遮那佛といふ佛樣を中心とするのであつて、これはお釋迦樣より一段上の方ナンだから、華嚴經は法華經より以上のものである。斯ういふやうに言ふ人もある。

兎に角さういふやうに、世の中で勢力のある四つの宗を開いた人々が、斯樣に一切のお經を讀み比べて、さうして法華經といふものは低いものである。或は法華經を第一だといふことは認められないといふことを申すのでありますから、隨てその流れを汲むところの『數千の學徒』、大勢の人々は、皆その考以上には出ない譯であるといふのであります。

日蓮歎いて云、上の諸人の義を左右なく非なりといはゞ、當世の諸人面を向べからず。非に非を重ね、結句は國主に讒奏して命に及べし。但し我等が慈父、雙林最後の御遺言に云、法に依て人に依らざれ等云云。

そこで日蓮上人は、末法の世に生れてどうしても法華經でなければ一切の人が救はれないといふことを考へて居られるのでありますから、これ等の樣子を見て歎いて言ふには、『上の諸人の義、左右なく非なりといはゞ、當世の諸人面を向べからず』何しろ華嚴宗とか、眞言宗とか、三論宗、法相宗といふやうなものは、支那の唐の時代に於て非常な勢力を有つて居つた。隨て日本が支那と交通をして、何でも支那の眞似をする時代に於ては、支那に於て勢力の有るものは日本に於ても勢力があるのですから、勢力の有る諸宗に對して、まだ眞實でないなどといふことを言へば、その言つたことは全く世間に用ひられないで、却つて世間の勢力の有るものが何か難くせを附けて排斥するやうに思はれて、世間から迫害を受けるやうになる。斯ういふことであります。

これは今の私達にはチョット想像の附かないことでありますが、日本が支那と交通を開いたのは、主に支那の唐の時代であります。

それより以前に於ては、日本の佛敎といふものは大體朝鮮を經て來て居る。だから聖德太子の時代には支那の影響を受けて居ない。朝鮮から傳つて居る。支那から影響を受けたのは、支那は唐の時代です。日本の歷史で言ひますと、天智天皇の前後からだん〳〵支那との交通が盛になりまして、さうして支那の文物制度、宗敎を皆日本に輸入した譯であります。ちやうど明治の初めに西洋のものを何でも輸入したと同じ狀態であります。だからその時代は支那崇拜であります。ちやうど日本が明治の初めに於て西洋崇拜であつたと少しも違ひはしない。今考へると馬鹿々々しいやうですが、吾々の子供の時に西洋崇拜といふものが甚しくて、英語が出來さへすれば皆偉い者だと思つた。その時分には『何しろ西

洋人は子供の時から英語が出來るから皆利口だ』と言つたといふ話があるが、そのくらゐのものであります、明治の初めに於ては、西洋人より日本人が偉くならうとは誰も思ひはしない。又洋服を着て居る者は皆偉い人だと思つた。すると『西洋人は乞食まで洋服を着て居るから皆利口だ』と言つた。さうして西洋と交通した初めにはエー、ビー、シーを無暗にやつたものです。又或は吾々が牛肉を食べ始めた時には、ナニモ牛肉が日本人の身に適して居るからといふのでなく、西洋人が食べるものだから、牛肉でも食つたら少しは利口になるだらうといふので食べ始めたくらゐのものです。さういふ風な明治の初めの事を考へて見れば能く解る。支那と交通を開いた時もその通りで、やはり明治の初めに西洋崇拜をして、吾々が子供の時は『西洋人が斯うやつた』と言へば皆それで通つた。ちやうどそれと同じことです。奈良朝の頃でも『支那で斯うだ』と言へば『アヽさうか』といふので、無條件で支那人の眞似をするといふことであつたのであります。だから支那で華嚴が流行るといへば日本でも華嚴だ。支那で眞言が流行るといへば日本でも眞言…、皆深い教理を研究する暇がありませぬから、やはり支那が先輩の國である以上は、支那で流行るものは日本でも流行るがいゝ、支那の眞似をして居れば萬事間違ひがないといふくらゐなことであります。今から考へると眞に腑甲斐ない話でありますが、當時の事情はさうであります。それで支那で流行る通りのものが日本で流行つた。支那の唐の時代に流行つたのが華嚴と眞言と三論と法相、それから少し遲れて禪と念佛、唐の時代に流行つたのはこの六宗であります。それがその通り日本に入つて來て、一番初めに華嚴、眞言、三論、法相、それから少し遲れて念佛と禪、支那の通りであります。少しも違ひはしない。明治の初めに吾々がビフテキを食ひ、葡萄酒を飲むと同じやうに、支那人のやることだからといふので何事もやつたものであります。それだから日蓮上人のやうに、そんな人の眞似などをしないで、自分の頭腦でしつかり考へて見る人から御覽になるならば、淺ましいことに思はれる譯です。お隣りの國で流行つて居るからといふので、お釋迦樣の御本意が何處にあるか知ないでやつて居るのは實につまらないことで、馬鹿々々しい、こんな事をして仕樣があるものかといふやうにお考へになるといふことはこれは尤もだと思ふ。當時の事情を能く察して見ないと、今日の狀態から考へたのでは解らない所が多いのです。それは奈良朝、平安朝に於ける支那崇拜といふものはひどいものであります。だから例へばお役所の公の文書は漢文で書かなければいけなかつた。そのくせ日本人の漢文だから碌なものではない、兎に角漢文で書かなければ日本のお役所では通用しない、幾ら下手でも漢文でなければならぬ、斯ういふ譯であります。日記を書くのでも、漢文で書かないと男らしくない、だから皆漢文で書いて居ります。定家卿初めさうであります。そのくせ下手な漢文でありますが…。今から考へれば馬鹿々々しい。ちようど日本でも西洋の眞似をして『何々デー』と言ふ、『何々日』と言つたら宜ささうなものだが、蠅を取るのを『蠅捕デー』と言ふ、それと同じことであります。當時の漢文といふものは支那の眞似をして居る。それでなければ世の中に通用しない。それだから紀貫之が土佐に行つて歸り掛けに紀行を書くのに、貫之といふ人は一種の見識がありますから假名まぢりで書いたが、それでは男の日記として世の中に發表することが出來ないから、土佐日記の初めには

男もすなる日記といふものを
女もしてみんとするなり。

女の日記だと書いて居る、當時は女でなければ假名まぢりは書かなかつたのであります。これは實に馬

鹿馬鹿しい話でありますが、マアさういふのが當時の事情であります。これは奈良朝から平安朝までさうであります。その事を頭腦に置いて見ないと解らない、何故そんなにくだらない事を騒いで居るかといへば、支那でも流行るからこつちもやるといふのでズット押して來て居る。さういふ弊害の積り重つた後で日蓮上人が出られた。日蓮上人のやうに自分の考でしつかり物を見極める方には、これは實に齒痒くて堪らないことに相違ないのであります（次續）

國家興隆の七法

一、國民屢々相會して施政を談議し、國防を嚴にして自ら守れ。
二、上下心を一にして相和し、俱に國事を議せ。
三、國風を尊びて妄りに改めず、禮を重んじ、義を尚べ。
四、男女の別を正し、長幼の序を守り、克く社會、家庭の純潔を保持せよ。
五、君主に忠に、父母に孝に、師長に奉事す。
六、祖先の宗廟を崇めて祭儀を廢せざれ。
七、道を尊び、德を崇め、善知識に近づきて厚く供養せよ。

——釋迦如來——

我統一團の使命

河合陟明

我統一團に於ける統一的理想の諸相

一　完全思想による完全なる人格統一　即ち　文化統一

人格統一の中心は　知識と信仰の統一に在り　（主觀的）
文化統一の樞軸は　哲學と宗教の統一に存す　（客觀的）
完全思想とは日蓮教學なり

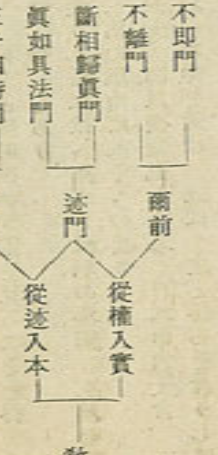
二　日蓮門下各派の統一

日蓮門下統一は（乃至　一般的に　宗教統一は）教義信仰の統一が　最大難關にして且つ最高主眼たり
教義信仰の統一とは　之を一言にして云はゞ即ち　本尊の統一なり
日蓮聖人の本尊觀は　法華經壽量品絶對中心論なり
壽量本尊觀は　釋尊本佛の人格實在論に在り
聖人滅後に於て　時代を經るに從ひ　諸種の本尊觀並び起る

之は即ち　壽量品觀の推移變遷と見ることを得
此に正系と傍系とあり
傍系に走りし所以は　本經と組判の解釋　正鵠を得ずして
大約二面の理由に基くものなり
一は　慈覺大師以後雜亂したる　日本中古天台　いはゆる台密思想の影響を受け　或は　之と勝劣を計りしに由る
一は　日蓮聖人の宗教的偉大性を過度に骨張して　釋尊との階位を紊亂せしに由る
日蓮門下各派を一括して　諸種本尊觀を　概別略評す

A　文證的　（即ち　教相的　教種的）
1　壽量品中心論　此に　正系と傍系とあり
2　方便品中心論
3　神力品中心論　（八品中心思想等を攝す）
4　御妙判中心論　（本尊抄等）

B　理證的（即ち　教義的　本質的）即ち
人格と妙法　の　人法論的
1　釋尊本佛本尊論
イ　正系　釋尊の人格實在論（人法一體論上の人格絶對論）
ロ　傍系（a）　本尊として釋尊本佛の名を唱ふるも　實體は
萬有神的なり
これ人を採る如くして　而も實は法なり
尚ほ進んで遂に　自己に歸するものあり
眞宗の村上專精氏　評して云く
日蓮門下　人法の爭ひは盲目的暗鬪なり』と
この妄評を聞いて憤起せざるものは、我日蓮門下　道念
の消磨せるを示すものたらずんば非ず
日輝師の思想は　この代表的のものなるも、之は　廣く
日蓮門下乃至　佛教古來　否人類一般宗教思想の　根
本的要請にして　而も又その　宿痾的病想なり。
故に、若破若立、殺活與奪　一に正統法華經の教義信仰
の完全說に俟つ。
而て　法華經系統に在つては　既に古天台の雜亂の初期
台密系思想に　この傍系說は澄觀す
参考　慈覺大師圓仁に始まるといふ　一代八重口傳の如き
は然り
左記の八門を要約すれば　四重興廢にあり　更に
四重興廢を要約すれば　教觀二門に歸す　而て　その
語謬の根源は　眞如觀念と本佛概念との混亂に基く
この精細なる哲學的批判は　殆ど全佛教　乃至　古今東西の
全人類思想の諸相に對する　大觀的批判なり。
而てこれ日蓮聖人が　叡嶽當時の　否　台密雜亂以來　或は
止觀の念佛化等　いはゆる惠檀八流等々の學系に對して
無濁の法水に毒を交へたり　と評破せられたる所以なり。
一代八重口傳略圖



而て　この本迹未分　觀心偏重の思想は　諸方面に著しく影
響す
傍系（b）　釋尊を本尊とするも　その本佛たると本化菩薩
たると　即ち　本果妙位と本因妙位との　時間的無限に
亘る　交替反覆を說くものあり
これ　釋尊を尊んで　その深厚の慈悲と濟度の妙用とを懇
說したるものにして、微衷すこぶる諒察すべきも、竟に
因果混亂の失　即ち　本佛觀に對する不明の譏を免れざ
るなり
傍系（c）　釋尊に於てもまた　十界互具を說くは正當なれ
ども　この本佛釋尊が　十界互具の故に　十界に轉生し
墮獄することもあり　と說くものあり
かくの如きは、苟くも大日本帝國臣民として　皇室の尊
嚴を冒瀆すると等しく、不敬の至　暗愚の極　斷然かく
の如き議論を停止・懲戒すべきなり。
これ實に　十界通じて　十如因果による　業緣轉生　特に
九界の實生實沒と　本佛應現の權現出沒とを　甄別せざ
るに由る。
傍系（d）　己身本佛本尊論
2　妙法本佛本尊論（法本人迹論）
傍系（a）　本果の妙法題目本佛論
（b）　本因の妙法題目本尊論
（c）　本因本果未分　或は　―本迹未分―の題目本尊論
参考　傳教大師の說かれたる
根本法華―
隱密法華
顯說法華―三種の中　根本法華を以て　本迹未分の重と
なし、その內容としては　法華經の文上に表
れざる　十如實相　等を以て　題目の法體と
なし　本尊となす
これ他宗よりの影響としては、台・東二密の口傳主義の　我
門流に浸潤せるものといふべく、
自宗の內部にあつては、祖判の解釋に於ける　特に
開目抄にいはゆる「一念三千は壽量品の文の底に沈めたり」
といふ、即ち　文上壽量に對する　文底秘沈の解釋に際し
て、その正意を得ずして　むしろ文外の曲解に墮せるもの
多きに由る。
3　曼陀羅本佛本尊論（法本人迹的傍系說と相關す）
4　日蓮論は　次の項に入れて論ず
C　現證的（即ち　人格的　宗教文化史的）
1　正統完全說としての　釋尊本佛本尊論は　既に上述
の如し。
2　之に對して　傍系的　日蓮本佛本尊論あり
これ前のB　人法論的の中に入るべきも　且くこゝに別說す
これ―神力別付論と
―日蓮聖人　及び　御妙判至上論と―を主因とし
時に　民族的觀念の加はるもの無きに非ず
如上に於ける傍系思想は　いはゆる

（天台の袋かつぎ と）を主流とし、二途不撰のもの甚だ
（釋迦の頭たゝき と）多し。

而て 完全說 即ち 正系信仰は 間然するところ無きもの
として 且く措き
爾餘の 傍系思想は 上述幾多の項の混合せるもの多きこと
は 論を俟たず。
現代に至つて 國情の背景のもとに 一種の色彩ある 傍系
的思想を產出せり
その稍々寬なるものは
(a) 妙法中心論の中に於て
(イ) 出世間面 覺道 法格 に於ては 日蓮聖人を至上
位(特に 末法に於ける至上位)とし (釋尊至上論の否
定)。
(ロ) 世間面 治道 王格 に於ては 天照大神を至上位
とす
これ 法本人迹論の一種なり。
その極端なるものは
(b) 天照大神を本地とし 釋尊を垂迹とするものあり
これ 本迹論の顚倒なれども これも亦 必ずしも今日始め
て出現したる思想には非ず 即ち
中古天台 及び 眞言 即ち 台東二密に於ける 本覺觀に
由來する 一實神道 及び 兩部神道 乃至 それらより
生じたる 唯一神道 等に於て 既に かゝる
神本佛迹思想ありしなり
但 現代のそれは、大體に於て國內的事情に由來せし 古代
に比して、その思想的意義 背景 規模 等を異にすると
ころに すこぶる特色あり。即ち 著しく民族的自覺 國
家的發展 天業恢弘 八紘一宇 等の 對世界的國情を洞
察せざるべからず。
而て 古來 思想と信仰の調和的問題として
神祇實類觀 神祇權現觀 等の
佛神本迹論 即ち 佛祖と國祖神 皇室 國體 乃至 八百
萬神 等との關係 換言すれば
神佛二教の問題は 日本精神論 日本宗教史 否一般的に
日本思想文化史上に於て
佛教傳來の古代より現代に及び 更に將來に亘りて 我國の
一大問題なり。
加之 佛教と大日本國體とが共に 夫々 世界無比の特質的
意義を有する 宗教と國家なる意味に於て かゝる
宗教救濟道と 統治經綸道との 完全統一は 實に 現代將
來に亘る 全世界人類文明の 懸案たるべき 一大模本問
題なることを知らざるべからず。
否更に又 實に然るのみならず この問題は
一面に於て 我日本國家の 天業經綸なる 國家的大躍進期
ごとに
他面に於て 我佛教を始め 一般に精神界に於ける高遠の理
想が要請 追求 愛慕せらるゝ 文化的大發展期ごとに
常に一大難問として 現出するに至らん。
支那事變に對して 之を徹底善處解決するは 今日の我等大
日本國民が 將來の國民に對する一大義務なるが如く、又
正に
神佛二教の問題に對して 今日この時局に際會せる我等日蓮
門下が 徹底完璧の解決を貫遂するは 將來の我が大聖人
門下に對し また全佛教徒に對し 更に全日本國民に對し
更に而て 全世界人類文明に對して 當然爲すべき 多
難にして光榮なる 思想的一大使命なり
これ 無始常恒 佛恩に浴し 萬世 皇恩を忝うせる我等の
この法 國 二面の大恩に酬ゆる 一大菩薩行たらずんば非
ず。

結論 日蓮聖人の本尊論正系に於ける統一の諸意義

三大秘法論(精說)

三 佛教の統一

日蓮教學は佛教を統一するものにして
日蓮門下各派の統一も 佛教全體の統一によつて基礎づけ
られざるべからず

序論の一 佛教統一に於ける哲學的眞理體系必然性の諸相

華嚴經 心佛及衆生 是三無差別の三法
心地觀經 教理行果の四法
天台大師 教行人理の四一開會 又は 名體宗用教の五重
玄義 特に 心佛衆生の三法を以て 妙法を釋す
日生恩師 教行人理果の五法 本質は 人理果の三法に在
り
理法—宇宙觀 人法—人生觀 果法—超人觀即ち佛陀觀
(イ) 宇宙の實相 (—不變の本體と— —活動の現象と—)を双點し
(ロ) 衆生の色心 (—不生不滅の妙身と— —業緣轉生の變化と—)を諦觀し
(ハ) 本佛の體用 (—三世常住の本身と— —隨緣應化の妙用と—)を信解す
これらの三法 乃至 五法が 古來の傳燈的解釋として
一種の建設的宗教としての 上部構造的眞理體系なるに對
して
宇宙 人生 超人 等の區別を 必ずしも分たずして、
これらを一括したる 更に模哲的なる 實在探求の眞理體系
を考察 反省し 樹立することを得べし 即ち 純正哲學
的に

絶對的實在なる一點に着眼して　その絶對の有無を探求するなり。

探求の出發點は　現實の事實より發す（これ一切の眞理探求の根本なり）

而て　現實の中心は　自己にあり

1　我は絶對であるのか

2　我は絶對でないのか

3　我の外に絶對があるのか

4　我は絶對と無關係であるのか

5　我も絶對と關係があるのか

6　我を離れた絶對は絶對ではない（一種の相對に墮する）ではないか

7　我の内にも絶對があるのではないか

8　しかし我のみが絶對であるか

9　我も絶對性を有するとして　我の外にも絶對があるのではないか

然らば　その關係は如何

10　我の外の　而も　我と關係する　絶對とは

a　我の根柢たる眞如　唯一本體にして普遍法界的絶對

b　我の完成たる本佛　一個人格にして而も即ち普遍法界的絶對

抑も　絶對的實在思想の探求は

宇宙人生を大觀して

有限に對する　無限性の實在
相對に對する　絶對性の實在
變化に對する　不變性の實在
差別に對する　唯一性の實在
を　求むるところに生れる

予は　絶對的實在を發見確立せんとするに際して　予自らの見地より

必要にして且つ十分なる條件を

左の四項とす

これ即ち又　いはゆる實在理由なり

實在の
（一）本體論的原理性
（二）生成論的因果性
（三）認識論的可知性
（四）價値論的活動性

實在は
（一）何を根柢とするか
（二）如何にして成立つか
（三）如何にして知られるか
（四）如何に働くか

佛教に於て　是を　價値的に　佛陀に於て論ずるときは、即ち

實在と價値との統一たる　人格的完全性に於て論ずるときは

佛陀は如何にして常住たり得るか　或は

佛陀の常住は（如何にして可能なりや　何によつて保證せられるか）といふ問題となり

これに對して

佛陀は

（一）眞如論的に　まづ本體に於て常住なり

（二）因果論的に　本行菩薩道　即ち　大始覺行の所得としての　功徳的果報身として常壽たり

（三）菩提論的に　無明なる根本惑を斷破して　明　法性　如實智を得たれば　再びまた迷惑に墮し―無常の流轉に輪廻する無し

（四）濟度論的に　救濟活動不斷にして　功徳を常恒に積聚して　益々壽命を增勝し　自行化他二面相即して　自我擴大の同化發展作用をなす

以上の　本體　本因　本覺　本果　なる四項系列の結論は

本佛の　本壽命妙としての常住實在を構成す

二は　因中所得の功徳と常壽
四は　果上所成の功徳と常壽
共に　行爲的理由
三は……
一は……
知識的理由
本体的理由

而て　是の如く

佛陀の常住性に對して、

本体的理由は　非人格的根據　即ち　法性的根據
知識的理由と　行爲的理由と　は　人格的根據　即ち　佛陀的根據
法佛一体
人法一如

非人格的根據は　先驗的　理的　無作・無爲
人格的根據は　經驗的　事的　有作・有爲にして即亦無作・無爲　或は　有始而無始

かくして

佛陀の實在は（先驗的根據の上に經驗的成立したる）個体的―宇宙的人格實在

といふことができる。從つて

法華經は　先驗論と經驗論との統一なり　否抑も

佛教全体が　先驗と經驗との統一なり

例へば、原始佛教より　部派佛教を通じて展開したる　色心互熏　種子熏習論　等を綜合したる

唯識論に於ける（有漏と無漏との　本有種子と新熏種子）
顯耶緣起（その無作本有と無始以來の熏習）
起信論に於ける　眞如不變の先驗論と　隨緣生起の經驗論
眞如緣起

天台の　一念三千　種子無上論
華嚴の　十玄六相　無盡緣起論
眞言の　金胎兩部　六大大日論
等　皆この二面を有し

法華經　日蓮教學は　その哲學的最高完成なり、即ち
經驗的人格の　時空的有始なる絶對完成を通じて
(イ)眞如理當の—超時空的・無作・先驗模據と、（その先驗實
在の　時空無限に　普遍妥當する所以の）
(ロ)十界事常の—時空的　無始・全經驗体系と　を
共に　包攝統一するのである。一言にしていへば、「成道
開覺」といふ
經驗的有始の切點を通じて
先驗的無作と
經驗的無始と　を　還元　統一するのである。
一般に　哲學的眞理とは　先驗と經驗との統一でなければな
らぬ。
而て　それは必ず　經驗による先驗と經驗との統一　でなけ
ればならぬ。
何となれば　これが　知識の意義であるからである。
即ち　知識　或は　認識によつて　實在を統一するものであ
るからである。
又かくの如きものが　均　抑　佛陀の覺　菩提　絶對智　絶對
者なるものの　人格的內容に關する　論理的規定でなけれ
ばならぬ。
而て　如上の　佛陀の實在に於ける　自覺的完成としての
四項系列に於て

(一)　眞如論は　法身的常住
(二)　因果論と
(三)　菩提論と　は　報身的常住　を表す。
(四)　濟度論は　應身的常住

又

(一)　は　宇宙性
(二)　は　衆生性
(三)
(四)　は　佛陀性

又　この四項は　實在論の價値的表現たる　即ち　實在
の人格的体驗たる涅槃論に於て見るときは、
涅槃の五性　滅度の三義　涅槃の三德　四德等に契當す
るものである。
此に於て　佛教の最高教義たる　從つて　佛教學の全体系を
構成する　佛身觀に關して、根本　或は　原始佛教より
發展佛教を一貫して　三身論なる　概念的分析と綜合とは
愈々その　普遍妥遍的眞理性を　發揮するものであること
を知るのである。
これを西洋哲學に於て　一例を採つて比較するに、
ウインデルバンドの哲學概論に於ては　哲學の理論問題と
して
實在の問題
生成の問題
認識の問題　の三項を擧げてゐる。

しかし宗教哲學に於ては
實在の活動性　の問題は　必須不可缺の條項である。
純理哲學に在つては　知識の完成を以て　最高となし得るで
もあらうが
宗教本質論としては　救濟の概念が　至高絶對の意味を有す
るのである。
否　純理的にも　實在に於ては　その本體　生成　認識　に
續いて　現實活動の問題、いはゆる本質の完全實現の後に
於ける　價値規定の論理を　到底無視することはできない。
これ　予が　特に　第四項を加へ、而て　佛身觀に於ては
この項に於て　應身常住の意義を　闡明せんとしたる所以で
ある。
(イ)本佛實在の論理は　此に至つて始めて完全に　構成的意
味に於て・成立するのである。加之また
(ロ)衆生成佛の論理も　この一事を缺如しては　遂に不可能
に歸する。
何となれば　衆生の成佛得道論に於て　因位に在つては
前三項は　自項　又は　自力項　であり
後一項は　他項　又は　他力項　であるのである　この合力に依るところの
自覺　即ち　始覺の完成したる　果位に至つて始めて
この他者を　自己の內容として　本覺・本果の概念を構成し
茲に全四項　悉く　自己の自覺的完成系列となるに至るの
である。
而てこれ　原始佛教以來　佛教の根本原理たる　緣起の法
即ち　諸法の相依相成　相即相入なる　一多相關の理の
價値的最高次段階に於ける實相であるのである。
發展佛教に於ける　大乘教義の精華と稱せらるゝ　華嚴哲學
に誇る　事々無碍　無盡緣起の法界　乃至　融三世間十身
具足の毘盧遮那佛の　果上現の法門たる性起の法門も、宇
宙原因論を　無明に置く限り　畢竟　無明緣起を出でず。
今こゝに　日蓮教學に於ける　無始本佛實在の　佛界緣起の
法門に於て　凡てそれらは悉く　止揚開顯せらるべき　運
命にあるのである。
本佛實在は　宗教客體的に　既成の事實であり
衆生成佛は　宗教主體的に　未成の觀念であるが
いはゆる生佛一如　一乘佛と稱する如く、その成立の論理は
徹頭徹尾　即ち　無始無終を一貫して　全く同一でなけれ
ばならぬ、即ち　常に普遍妥當するものであるのである。
現代哲學の寵兒たる　種々の人間學も　此に至つてまさしく
開顯的に　完成されるのである。又この立場よりする
佛教とキリスト教との比較は、けだし東西文明の括目すべき
一大決勝戰を展開するであらう。
佛教人間學に於ける　人間の絶對性の諸相は、位を換へれば

即ち　高次的には　昊上に於ける佛陀の絶對性の諸象徴である。

その詳細は後日に讓り、人間たると佛陀たるとを通じ　主體客體に亘つて、

宗教哲學的にも　又　純正哲學的にも

以上の　四項系列を以て成る　一群の眞理體系を以て

實在の根本原理に關する　必要にして十分なる條件なりと

予は考へるのである。

序論の二　佛教の根本的立場

(a)　カントは　ニュートンの數學　及び　これに根據する自然科學の　眞理の確實性を立證せんとして　純粋理性を批判し　先驗的統覺作用に於ける　自然の律法者としての純粋自我の權威を發見確立して　いはゆるコペルニクス的轉回を　認識論上に齎したが、しかも純理的には　物自體の問題等　幾多の矛盾を犯したるまゝ　形而上學の可能に就ては　到底斷念せざるを得ざるに至り　それにも拘らず　彼の人格的信念に於ては　遂に實踐理性の優位を主張した。　彼の哲學は猶ほ　外的客觀的自然界の成立に關する反省を基調としたものであつた。

(b)　ヘーゲルはむしろ　人文思想史　殊にギリシヤ及びヘブライの　哲學及び宗教に始まる　幾多の思想的變遷發達史を通觀しつゝ　その歴史に於ける轉變極まりなき　人生の悲劇的矛盾相剋を　説明し且つ和解する所以の道としてこれをロゴスの構造に求め　いはゆる理性の狡智としての辨證法の論理が生れたのである。しかも彼の彪大なる哲學體系は　實在の原理を絶對精神として　すべての存在の汎論理的　汎價値的なる主張にも拘らず　否むしろその爲の故に　概念詩と評せられる如き　遂に一種の自然主義に歸したのである。加之　彼にあつては　實在即ち理性の論理的實現過程と　その本質を悉く實現したる價値的完全實在の論理的規定とは　全く同一視され（辨證法が終局なき無限の過程であるならば　後者の事實は不可能となるのであるが）、論理學と形而上學　歴史學と神學とは　全然同置されるに至つた。神自らが實にさ迷ひ出でゝ　再び自己自身に復歸する所以の道が　辨證法であり　論理學であり　歴史であり　形而上學であり　神學であるのである。

カントは、數學及び科學の確實性を　既に前提として承認し　その自然界の成立に新たなる認識の目を開いて　獨らず　も自我の偉大なる權威を發見したが　遂に眞實在の認識に就ては斷念せざるを得なかつた。

ヘーゲルは　歴史の認識に出發して　精神の形而上學を打ち樹てながら　遂に一種の自然主義に墮し、一面に於ては　現代に盛行する歴史哲學の先驅者となつたと同時に、他面に於ては　その變態的一支流たる　歴史的社會的なる近代的唯物論　いはゆるマルキシズム等の醸醸する素地となつた。

(c)　これに反し　近世哲學の鼻祖として　何等の對象をも前提せずして　一切懐疑論より出發したデカルトの立場はカント等に比ぶれば　より一層哲學的に根本的といひ得るが　しかもその論理的過程と歸結は　甚しく慘らざるものである。

(d)　今　西洋哲學史上の諸家を評論することは　もとより當面の任ではないが、溯つてその哲學の父と稱せられる古代ギリシヤのプラトーの哲學　特にそのイデアの直觀とアナムネジスの理論　牢獄の囚人とその光に向つての轉向を以て喩へた人生論の教説は、純理的意義に於てよりも　むしろ著しく宗教的色彩を帶びたものである。然しながら　その理論は、直觀的ではあるが猶ほもとより合理的普遍性を缺いたものであることを　看過することはできない。

(e)　翻つて　釋尊の立場は如何。人間の生老病死といふ根本的事實に對する　根本的反省より出發して　その一切を解説したる　無上の勝處を求め　當時の鬱然として盛を極めた　一切の諸宗教思想　哲學思想に　猶ほ精神の滿足を得る能はずして　端坐瞑想　苦行多年　遂に　無師獨悟　豁然として開覺成道されたる　大覺の眞光は、その「我は一切知見　一切見者　勝一切者」の大宣言に現れゐる如く、人類古今の全思想史を包括する　空前絶後の大事實となつたのである。

釋尊は　かの外的自然界の承認前提のもとに出發したといふ如きものでもなく、また當時の宗教實踐的諸派の如く　客觀界そのものに解説の因を求められたのでもなく、また歴史に於ける矛盾爭鬪を　理性の辨證によつて和解せんとされたのでもなく、また一切懐疑の否定の後に　獨斷的なる神の存在を容認されたものでもなく、また自己自身の存在が　遂に暗き獄中に於て光を求めて止まざる囚人であるといふ如き　人間的境界に終始されたのでもなく、

その眞理探究の出發點に於て　最も人生に根本的であり　且つ最もその内包的意義に於て深遠であり雄大であり、更にまた　客觀的自然界や歴史界を既に前提し　從つてその價値を承認して、そこより發足して　その上に價値的構成を試みたものでもなく、人生　或は　人間の運命に對して　最初より　深い洞察の眼に根本的價値判斷が加へられ、實踐理性の優位が　最後の到達ではなくして最初より認容せられ、しかもかくの如く人生及び世界に對して　根本的懐疑であり　反省でありながら　純理的に一切の獨斷を排除し　不合理を否定し、遂に　迷妄なる牢獄の囚人の境遇を解説して　大覺菩提の境界に達し　大般涅槃を體現せられたのである。

人生に對する最根本的なる問發　反省と、眞理探求に於ける最大の忍苦　犧牲と、而てその結果としてその報ゐられたるところとして殘たるところの無上菩提といふ大事實に於て、人類最大の光明的思想を產出したるものが、實に「釋尊の覺」といふ事柄であつたのである。

その出發點に於て　その規模に於て　その道程に於て　最大の意義と犧牲とを拂つたものが　また最大の結果を贏ち得たといふことは　まことに偶然ではない。

而て　法界の法王　精神界の轉輪聖王を以て任ぜられたる大聖佛陀釋尊が、沙門乞食の生活を以て　三世諸佛一貫の如來の行なりと　言はれたることは、眞に興味深き事實といふべきであらう。

更に之に加ふるに、旋陀羅が子より出でたる一介の沙門日蓮が、遂に久遠本化の大菩薩　本佛陽一の高弟を以て任ずる上行の自覺に到達したといふことは、又かの如來釋尊と宛も好個の一對をなす意味深き歷史的事實でなければならぬ。

序論の三　佛教體系化の妥當性の問題

羅什三藏の漢土に入つて、支那傳來の國情たる　王朝の交替頻々たる時代に當り、精神界裡　別に一新天地を開拓して、般若　維摩　無量壽　等の諸經　並びに　これらの內容を組織的に詳細論議したる　中觀論　大智度論　百論　成實論　等の諸論部を始めて譯出し、加ふるに　その門下たる四聖十哲等　天下の俊傑四方の義學英秀の徒が　翕然として蝟集し、しかもこれらの高弟は　既に老莊等の文學に精通しゐたるが故に　その文學思想を以て　三藏の譯述を潤色し、ために佛教文學　或は支那佛教思想史上に　一大發展を齎し　一新時期を劃せしめるに至つたのであるが特に　姚秦の弘始七年の冬より八年の夏に亘り　長安の草堂寺に於て　これら雲集の學徒を率ゐて　佛陀一代統一の聖典たる　妙法華經を譯出してより（皇紀一〇六六年　西曆四〇六年）、大乘の根本聖典が　西來の耆宿碩學によつて譯出せらるゝこと　陸續として踵を接し、即ちこの後九年にして　法顯三藏の六卷泥洹經は譯出せられ、更に五年にして　覺賢三藏の六十華嚴出でゝ　いはゆる佛陀成道の初轉法輪を明かにし、更にその翌年に至つて　曇無讖三藏により四十卷の大涅槃經の譯出せらるゝあり　以て佛陀終窮の遺教を委細に宣揚し、かくて此に至つて　大小乘　三乘一乘の諸經律論等、佛說一代の始中終をまさに具備するに至つた。けだし實に支那譯經史上　否　佛教史上の一大偉觀と稱すべきであらう。

こゝに於てか　これら一代の諸經　並びに滅後の諸論に表れたる　佛教思想の種々相を　比較考量し　組織體系化せんとするの要求は　おのづから生起し　また俄然として激發

醸成せらるゝに至り、まづ、その初　廬山の慧遠に學び往いて羅什の麾丈に侍し　更に涅槃の經說に沈潛專思したる

道場寺の慧觀の　頓　漸　不定　の三教と　漸中五時の教判を以て　佛教史上にいはゆる教判の創成せられたるを始として、

- (一)頓教
  - 華嚴經——菩薩の爲に具足して理を顯す
- (二)漸教
  - 初時教—有相教—小乘諸教—三乘別教
  - 二時教—無相教—般若經——三乘通教—三乘同觀空宗
  - 三時教—抑揚教—維摩・思益經等
  - 四時教—同歸教—法華經——一乘破三歸一
  - 五時教—常住教—涅槃經——佛性法身常住
- (三)偏方不定教——金光明・勝鬘經等

劉虬の　三教五時七階說　漸教中に人天教を加へて　三乘別教を開く

笈師の三教三時　漸教を以て　有相　無相　常住　の三時となす

宗愛師の三教四時　更に再び　同歸教を加ふ　等　次第に江南の地に發展し、

また江北の地にあつては　地論宗の祖たる

光統律師の　頓　漸　圓　の三教　及び　四宗の教判を始として

- (一)因緣宗—立性宗—毘曇—六因四緣
- (二)假名宗—破性宗—成實論—三假浮虛
- (三)詐相宗—不眞宗—般若・維摩・三論—諸法無相
- (四)常住宗—顯實宗—涅槃・華嚴—佛性常住

自軌師の五宗　法界宗を加へて華嚴經中心

法寧師の六宗　眞宗（法華）四宗（華嚴）を加ふる　等　曆々加說の義門を出し

かくて江南にあつては

- 經に於ては主として　般若經　或は　涅槃經を中心とし
- 論に於ては主として　三論　乃至　四論とし

江北にあつては

- 經に於ては主として　華嚴經を中心とし
- 論に於ては主として　地論　攝論とし

諸家の學派　及び　宗派が　種々なる發展をなすに至り、遂に

羅什の妙法華經譯出の後　百三十二年にして　天台智顗を出だし

化儀に長ぜる江南の教判と　化法の色彩に富める江北の教判

とを合流して、五時八教の判釋を立し　法華經に於ける諸乘一佛乘の妙旨を以て　佛教統一の理想を發揮し、その然る所以に就ては　又更に三種教相を以て　その根據を一層明かにし、大蘇道場　及び　台嶺隧道の仙郷に　昏曉苦到靈講夜禪　教觀双具しつゝ　具さに思惟修習して　得たるところのものを以て　出でゝ　荊州玉泉寺に　漸く文句玄義　止觀　等　圓熟の妙法思想を屢々として講說し、佛教教理門に於て佛教實踐門に於て　大いに世尊一期の眞實義を宣揚し、佛陀滅後に於ける佛教思想史上の　一大分水嶺を形成して、爾來　諸宗諸派の教學　一として天台教義の影響を蒙らざるものなきに至つたのである。（以下省略）

教判論の吟味（下略）

（A）歷史的佛陀觀に於て

（イ）經典佛說論より見たる　佛教體系化

（ロ）經典の　佛滅後に於ける　歷史的成立より見たる　佛教體系化

（B）超歷史的佛陀觀より見たる　佛說論　乃至　佛教體系化

（C）純理哲學的思想內容より見たる諸說の批判と統一

本論　佛教の體系的統一

佛教の教理的本質の諸相と　その統一

佛教體系の六大部門（經律を出とし論釋を從とす）

（A）經典の歷史的成立による思想的順序

（B）經典の價値的順序　或は

純理的思想內容による諸種の順序構成とその統一

（C）佛教諸宗の開顯統一

四　正法と國家との統一（時局指導の諸問題をも含む）

五　人類思想文明の統一

結論　法界の統一的大觀

南無妙法蓮華經

昭和十四年八月初旬　　法華經八嶽の東麓に於て

武器なき戰士の歌

八木沼丈夫作詩

(1)

君空に照る陽は一つだぞ　四億の友は待ちなむぞ
あゝ、ひるがへる〳〵　あゝ、奮ひ立ち〳〵

(2)

國旗のもとに吾死なむ　愛馬と共に吾往かむ
屍こえて乘り踰えて　滿ちたる慈みさながらに
君、大陸の柱たれ　厭捧てと君雄叫べよ
武器なき戰士宣撫官。　戰場の母宣撫官。

(3)

殘存匪團何ものぞ　あゝ沸ち來る紅き血を
夏草深き野に濺ぎ　乾ける土を喚び醒まし
興亞の泉湧かしめむ　武器なき戰士宣撫官。

近詠數首

大八木義雄

七月七日熱田神宮、護國神社、陸軍墓地等へ往復徒歩參拜して

汗あえて、神まうてしつ、水にすら、飢ゑて戰ふ、人偲ふへく。

斃れつる、人のみ墓に、ぬかつきぬ、恨ある日を、又も迎へて。

凱旋將軍

いくさ君、歸りて說くそ、頼母しき、亞細亞を興す、道の數々。

歸り來て、いさをも說かす、大御稜威、たたはめり、戰のをさ。

戰時色

もろ人の、撓まぬ樣そ、頼母しき、いつ果てむとも、知らぬいくさに。

ひと心、いよよ締りつ、誰か身にも、黃金作りの、物は着けすて。

日參

捧け行く、旗の色さへ、あせにけり、見の日參りも、年を重ねて。

見送らぬ、人こそなけれ、嚴かに、神垣さして、進む日まゐり。

記事

本部團報

講習會 八月は毎週の日曜日例會を一括して、二十日から二十三日まで毎晩六時半より修法、特に皇軍の武運長久と、我戰陣殁精靈回向、七時より九時迄、信仰報國第二回夏期講習會を本部講堂に開催し、市民思想の善導に向つて叫びかけた。今や日支事變は益々微妙な國際關係に由り重大化せんとしてゐる。これ素より存じの旨であつて、其處には一路邪往邁進あるのみである。至誠の發する處鬼神も避ける、敢て右顧左眄の要はない。それには國民の眞に精神的自覺を促進堅實にしておかねばならぬ。こゝに正しい宗教の信念を與ふること刻下の最大急務と思ふ。吾等の信仰は直ちに愛國の精神となり、時弊を救濟する對應の教化運動に躍進すべきを本領としてゐる。古い型はスツパリと捨てゝ公明正大な精神から此國を思ひ、斯道を擁し、大慈念に繼へて堂々統一の利劍を提げて進む處に、本多學系の特色があることを確信する者である。

次に四日間講習のテキストを掲げておく。昨年は二三の方より講述の內容を知らす樣にと御注告があつたから、本年は適當に漸次お目にかくることに手配がしてありますから、御諒承願ひたい。

早朝勤行 暑いからといつて信仰を忘ることあつてはなるまい、ソンナものは一種の道楽氣分か、お坐なり的のものとしか思へない、殊に今は國を擧げて總力戰最中なんである、各官署でも暑中休暇を廢されてゐる、況んや衣食よりも大切な信仰を暑いから休むといふことは、未だそれ丈け眞劍でない證據であるまいか。爰に同心會や立正青年團の有志は、毎月曙日朝五時半から汗をあびて、一心淸淨に勤行を續けてゐる寒行よりも夏行の方が一層身にこたへると感想談が出る。朝早いので、コラ〳〵と辻の交番で呼止められる同志もある、それが緣で共鳴者も出來る、往くとして可ならざるはない、有難いことである。初心の方は此機會に參加されんことをお奬めしておく。

講習會テキスト

第一日

常非常時に際して

池田新一

一、緒言

二、日支事變の世界的意義
　1、事變の假相と實相……實は國際秘密力猶太の侵攻
　2、國際猶太世界制覇と神州日本の蹶起

三、神州日本の權威と世界救濟の使命
　1、西歐文明と猶太教
　2、東洋文明と佛教
　3、法華經國日本と猶太民族

四、同胞よ、日蓮大聖人を仰げ、而して人類に眞正偉大なる世界文明の指針を與へよ。

五、結論

擧公の翻經の記に云く、大師須梨耶蘇摩左の手に法華經を持し、右の手に鳩摩羅什の頂を摩て、授與して云く、佛日西に入つて遺耀將に東に及ばんとす、此經典は東北に緣あり、汝愼んで傳弘せよ、云云。予此記の文を拜見して兩眼瀧の如く一身悅を徧くす、此經典は東北に緣あり云云。西天月氏國は未申の方、日本國は丑寅の方なり、天竺に於て東北に緣ありとは豈に日本國にあらずや。遊式の筆に云く、初め西より傳ふ、猶ほ月の生ずるがごとく、今復東より返る、猶ほ日の昇るが如し云云。正像二千年には西より東に流る、暮月の西空より始むるが如し、末法五百年には東より西に入る、朝日の東天より出るに似たり。

——日蓮聖人、貧谷抄——

妙法蓮華經如來壽量品綱要

山口智光

一、如來壽量品の題號
二、如來誠諦の誠信（三誠三請重請重誠）
三、本佛の妙體妙用（如來秘密神通之力）
四、惑者壽量品を解せず（一切世間天人及阿修羅……）
五、應身釋尊の顯本（然善男子　我實成佛以來……）
六、五百塵點の久遠（譬如五百千萬億……）
七、本佛の本土と化境（我常在此娑婆世界…亦於餘處…）
八、迹佛に迷ふを破す（我說然燈佛等……皆以方便分別）
九、本佛絕大の活動
　1、大慈悲の意輪（我以佛眼觀其信等諸根利鈍）
　2、名字不同の迹佛（隨所應度處々自說名字不同年紀大小）
　3、歡喜法悅の勝益（又以種々方便……能令衆生發歡喜心）
一〇、釋尊降誕の大因緣（如來見諸衆生樂於小法……）
一一、現身說法の妙化（如來所演經典……或說己身或說他身……）
一二、本佛の妙智を明す（如來如實知見三界之相……無有錯謬）
一三、衆生の性欲不同（以諸衆生有種々性—欲—行—憶想分別故）
一四、佛教教化の眞目的（欲令生諸善根……）
一五、久遠劫來不斷の妙化（所作佛事未曾暫廢）
一六、本佛の人格的實在（如是我成佛已來甚大久遠……常住不滅）
一七、因行に約して果德を顯す（我本行菩薩道……）
一八、世尊入滅を現ずる所以（然今非實滅度……）
一九、滅を唱へて益あり（必當生於難遭之想心懷戀慕……）
二〇、如來教化の不虛を示す（諸佛如來法皆如是爲度衆生皆實不虛）
二一、良醫治子の譬喩（我此土安穩天人常充滿……）
二二、自我偈の通觀（每自作是念以何令衆生……）
二三、三世益物
二四、本國土妙
二五、如來三輪の妙化

第二日

經濟界の今日及將來

上田辰卯

一、自由主義經濟と統制主義經濟の意義
一、個人經濟より團體經濟への推移
一、日本人の優れたる點は團體的結束力
一、滿支人と日本人との比較
　經濟戰に於て常に彼等に敗北する原因
一、今後の滿支大陸への經濟發展の指導精神
一、佛教の經濟觀
一、個人的所有權の肯定と利己的消費、支配權の否定

以上

立正安國論略講

和賀義見

一、安國論著作の緣由
　イ、著作の近由。　ロ、著作の遠由。　ハ、付文と玄意
二、本書の主眼
　實乘の一善。　統一開顯。
三、本書の內容
　1、災難の由來を明す。
　2、災難の經證を擧ぐ（イ、藥師經の七難　ロ、大集經の三災、其他
　3、破法破國の因緣。
　4、法然の破法
　5、撰擇集の非、和漢例證を擧げ拾因歸善塞逆緣損を論す。
　6、法然の詐實の上奏文。
　7、災妖を攘ふの法を明す。（法國冥合）
　8、誇法退治の方法を示す。
　9、總じて誇法退治を促し改心歸善を勸む。
　10、歸正誤を領解す。

畢

第三日

吾法統と傍派

（優陀那院日輝師を中心として）

中村清一

A、日輝師の本尊論（妙宗本尊略辨）……全集卷三
一、人本尊論　本尊問答鈔會通
二、妙法本佛論
三、中尊傍邊論
四、傍邊釋迦迹佛論
五、釋尊臨士論
六、一體三寶論
七、信念と觀智との關係

B、日輝師の實相論（一念三千論）……全集卷三
一、總躰本佛論
1、實相とは眞實の相貌也。謂く三界の依正、十界の名實天然の自相、是を實相と名く。謂く佛智所見の實相の體全く一切衆生の自爾の相貌にして、佛と衆生と實體二無し。唯一法界、虛融無差、全十方三世、十界の依正、以て一人の身相と爲し、亦以て一心の常相と爲す一切法に於て永く差相を絕ち、染淨依正の隔情を離れて、自他因果の情執を滅し、是非得失の異見を滅ぼし十界の依正を攝して以て一身と爲し、十方三世を束ねて一念と爲す。永く衆生の妄見を出過し、斷じて九界の見解を融するを、方に實相の正體を見ることを得と爲す也。（一二四—五頁）
2、十界の色像は通じて一佛界の形相性體なり。是を本地と爲す。無明の隔情差別に執するが故に一佛境に於て十界の隔異を分別す。名けて迹中と爲す。迹とは形迹を取る也、本とは本體を知る也。（一四八頁）
3、九界常住は必ず佛界亦た九を斷ぜずして之を具するに由る。（一五四頁）
4、本門の敎意は、十界俱に本位に住す。無作三身何ぞ成佛を事とせんや。本より迹を垂る。相々皆實なり。何ぞ九界を隔てんや。開迹顯本すれば九界皆實なり、何ぞ一果を執せんや。故に本門は必ず十を具して實と爲る也。（一五三頁）

二、迹悟無實論

5、九界所見の當相は必ず應に本有常住眞實の相貌なるべし、九界能見の情智は必ず應に是本佛智見無有錯謬の照了なるべし。是れ最も實相の要義を究盡するもの、破執斷惑の深意也。　然るに經文明かに九界の非を簡び、祖書亦了說無し。是れ人情最難信の事、最も容易に捧得すべき者に非ず。故に今穩々に分別し疑滯を破り昏曚を除かんと欲す。（一七三―四頁）

6、若し九界の情見眞實に非ずば、即ち是れ實相の外更に諸法有也、諸法實相又所漏有也、純一實相の義成ぜざる也。復次に迹門の中理に約して邊邪皆中正なりと會す。例して知る本門の中は必ず當に事に約して情見を會する也。然らば則ち若しは情、若しは見、事體本有にして復た滅すべからず。法々皆本有常住なり、故に一情一見も幻化虛妄の法に非ず。一切の情見に達する皆是れ本佛無作の知見なり、當位皆眞實也、即ち悉く妙法と爲す也。謂つて是れ蠱法にして妙法に非ずと爲す者は、隔異の執情にして自ら捨案嫌談する耳。復た次に本門の意は事の十界を指して常住と爲す。豈境是にして而も智非ならん耶。……故に十界常住なれば則ち若しは迷、若しは悟、若しは縛、若しは脫、若しは邪見、若しは三毒、若しは十惡、若しは五逆、若しは諸法、若しは一闡提、悉く皆本有常住なり。一法の眞實ならざる無く、一法の本無今有なる無く、一法の斷ずべき無く、一法の滅すべき無し。……九界の法皆本有常住、無始無作なるを以ての故也。（一七四頁）

7、知見異る故に九界を論ず、是則ち九界常住なる故に情見必ず常住なるは理必ず然なり。情見常なるが故に即ち眞實なり、虛妄の法に非ざる也。（一七六頁）

8、是の故に教に約して則ち必ず九界の情謂を簡びて佛界の知見を顯はす、若し理に約せば九界の情謂即ち是れ本佛無作の知見也。故に單に理を論ぜば是に非ず非に非ず、得失に非ず、若し教に約して理を論ぜば則ち但だ佛身獨り是也。（一七八頁）

9、良に以れば境十界を分つは全く能見に異見あるに由る（七七九頁）

10、綴令事具を談ずるも、凡夫の所見實相の眞境に非らずと謂ふ者は是れ未だ宗義を盡さず（二五九頁）

三、常無常俱存論

11、實を明す故に但佛界常住の依正有り。權を明す故に具に十界無常の依正有り。故に實を顯せば十界の依正の當體即ち常なり、佛の知見に約する故なり、權を談ずれば常住の依正の當相即ち無常なり。衆生の所見に約する故なり。……故に知んぬ、常と無常と並び存して廢せず（一七七頁）

12、本有の淨土常に三災四劫の爲に燒かる、雨曼陀羅華大火の所燒を妨げず、天人常充滿は劫盡を妨げず。……報土の常樂妥婆の苦惱を懷せず、四土相卿し本迹同時なり。是を不可思議の境界、非常非無常、非本非迹、諸相具足、無漏不思議、甚深微妙の法と爲す。（一七八頁）

13、陰入界の法、隔歐の當相皆本然の相にして眞實に非ざる無し。苦惱逼迫皆常住の事、本佛無作の法樂也。（一七五頁）

四、個體非實在論

14、故に果果に非ず、但だ知見覺を以ての故に果と名づく。故に所證の境に約すれば則ち凡聖通じて果躰に住す。若し能修能證の智に約せば、凡聖通じて能契の因用を得、且つ迷悟得失を論ず、故に因果の名有る也。若し究竟して之を論ぜば、實に因に非ず果に非ず、若し凡聖通じて果躰に在りとは是れ本門の意也（一八〇頁）

15、（妙宗本尊辨）　然るに若し深く之を原ぬれば、本有の一佛流れて衆生と爲り、迹從り悟に向ひ、因從り果に至り、乃至道樹にして本有の法界海に歸入す、隔異の色心始めて滅するを以ての故也。已に歸入すと雖も、更に復た智散じ身分つて果從り因に入り、悟從り迷に入り、理即の衆生と爲り進んで亦た果に向ふこと番々止まず。（卷三、三三六頁）

五、諸法一體論

16、實相とは、諸經に諸法實相を說くこと繞ね第一義空に約す。乃至無量義經に亦曰く、無相不相不相無相、名けて實相と爲すと。觀音賢經も亦但だ空寂を談ず。妙經方便品に亦曰く、知第一寂滅諸法寂滅相と。序品に又曰く、諸法の相を觀ずるに二相有ること無し、猶虛空の如しと。藥艸品に又云く、如來は是の一相一味の法を知ろしめす、所謂解說相、離相、滅相、究竟して涅槃常寂滅相なり、終に空に歸すと。安樂行品に又云く、一切法の空を觀ずること實相の如し等と。當に知るべし、四教五時の所說空寂無相に過ぎざる也。然るに實相の極要は諸法一躰に在り。何となれば迹門は諸乘即一乘を以て宗と爲す。本門は諸佛即一佛を以て極と爲す。迹門は五佛道同十方一乘と言ひ、本門は諸佛如來法皆如是と言ふ。……荊溪釋して云く、一心一念法界に徧しと。……諸經論偏に空を談ずるは、情執有るに由るを以ての故に、切に有執を破して差相を亡泯するのみ、諸大乘に圓頓を談じ大心を歎ずるは意唯だ正しく法界歸一に在るのみ。法界を以て自己一心に歸せんと欲する者也。故に一心を以て法界を攝すれば、見破し思除き塵沙滅し無明亡ず。三智照すべく、五眼開

（卷三、三三六頁）

く可く、法身體顯れ、報身德明かに、應身徧普す。……嗚呼大哉妙哉、華嚴の法界、法華の實相久成の一佛止觀の一念豈に是に外ならんや。……是れ唯一實相、不可思議の上乘也。

（一九四―五頁）

C本迹論（本迹歸宗論）

一、本勝迹劣の意義
二、觀心本尊得意鈔の意義
三、五重三段
四、十法界鈔
五、開目鈔
六、日輝師本迹論の大要

× × 畢

× × 畢

法國冥合

田中道爾

一、序論
二、歐洲の風雲急を告ぐ
三、國內の總動員
四、國民擧止を失ふの時大聖を憶ふ
五、法を知り國を思ふ
六、結論

以上

第四日

軍人と日蓮主義

陸軍工兵中佐　岩淵經夫

一、入信の動機
二、宗教信仰の必要
1、人格完成の爲め
勅諭と信仰
2、國體信解の必要上
神道の特色と國體
3、道德實行上
三、國體と日蓮主義
1、肇國宏遠樹德深厚＝肇國の理想
久遠實成と天壤無窮
2、主師親の三德と大義名分
四、肇國の理想と本門戒壇思想
1、八紘一宇六合一都の大理想と世界統一の天業
2、皇道大亞細亞主義
五、世界統一と日本文化の高揚
1、法華經に基く理想的統一的文化の建設
2、神佛儒三教の鼎立
六、軍人精神と日蓮主義
1、日本精神
2、聖戰の意義と我等の顯行――菩薩行
七、吾等の生活原理
1、赤子の自覺。頭首股肱の關係。皇運扶翼の一途
2、佛子の自覺に立ち佛の所遣として佛の事を行ずるのみ
八、戰場に於ける體驗
1、七生報國、不滅の信念の强靭
2、人相手の生活と天相手の生活――感謝生活
3、無所得の心の强さ。

以上

本多上人の高風

磯部滿事

緒言

初めにお斷りして置くことは、上人の偉大な風丰に就ては完全を期すことは頗る難かしい、總かにその一片鱗を覗ふに過ぎない、又以て各位追懐の一助ともならば有難い次第である。……世間には自分の眼鏡を以て對手を見やうとする者が多い、そこに非常な誤解を招くが、上人に對しても往々間違つた批判を耳にせんでもないが、これは自分のよい警誡と思ふ。

今 恩師の高風を偲ぶに就て、偏見を去り、純潔順善の心持ちで聊か教化を中心に申述べたい。

經歷

上人の高風を偲ぶには、御一代の經歷を窺ふ時に自ら浮び出るであらう。爰にその重要と思ふ點を若干記して見たい。

慶應三年三月十三日　播州姫路國友家次男出生、父堅次郎氏、母勝子氏、幼名長二と稱す

明治十二年春　姫路市城東小學校卒業

明治十二年夏　姫路妙立寺池田日昌師に就て得度し聖應と號す。

同　秋　師の遷化に遇ひ、兒玉日容師に隨身す。歳末本多日塩師養子となる

明治十七年秋　堺の妙滿寺住職となる。

廿二年春　二年後上京して哲學館に學ぶ。

同　夏　妙善寺住職

上京、壺泰寺に。秋、興常寺に住職。

廿三年　教務部長に任命。

廿五年一月　突如宗門剃籍處分。

同　歳末　淺草に顯本法華宗宗義弘通所を設立

廿六、七年　岡山、津山、神戸に等しく弘通所建設。

廿八年　宗門に復籍、宗義綱要の編纂に當る

廿九年十二月　統一團結成。

三十年五月　品川、妙國寺住職。

卅一年十一月　顯本法華宗名の公稱認可。

卅三年春　管長事務取扱に任命。卅五年、大僧正。卅八年、管長當選。大正十五年迄在職。

四十五年春　淺草に統一開落慶。

大正六年三月　大藏經要義第一卷出版、爾後隔月に一冊宛十一卷迄。

十一年十月　立正大師謚號宣下

昭和三年十一月　天杯下賜。

四年三月　同師會結成。

五年十月　統一團協賛會參與。

六年三月十六日　遷化、世壽六十五。

教化

國民思想善導に終始一貫された上人の御健闘は、先づ宗門の改革から始まり、門下の統合にと進み、更に國民思想の統一を劃策し、而して佛教が出世間のみならず世間的にも即ち一乘の明教なることを示教利喜された。詮ずる所上人は、

一、護法愛國の至誠躍如。

二、法統擁護、雜亂發起、正信示教。

三、擬宗教の排撃、日蓮主義統一の主唱

四、國家主義の擁護者として佛教の本旨を確立。

五、宗風刷新、教化中心。

六、政教の關係を圓滿ならしむることに盡瘁。

七、報本反始の實踐。等々。

書冊は百世を照す、數多き著述中殊に大藏經要義選述の如きは、佛滅後に於ける第一人者であるまいか。上人の胸中は外部に形の上の働きを示すと俱に、極めて地味な思想の内面的研究に對して、一の基準を發見し光明を與へて其の啓發に資することであつたかと思ふ。

結論

絶對の教權、攻撃の元氣、包容の度量を以て五十年に亘る上人の法戰は寔に目覺しいものであつた。特に宗門の革正と教旨の正明と、門下統合運動と、大師號に就ては四大法動と思ふ。しかも此の立正大師號と大藏經要義は未曾有の偉事であるまいか。一萬の法座、數十の著書、機關誌統一の如き今猶上人主宰の下に益々發展に赴いてゐる。是れ偏に　上人冥護の然らしむべきを感銘し、虔て報恩謝德の唱題を捧げて本講を結ぶ。南無妙法蓮華經　畢

團費誌料寄附金及維持費領收（自七月二十一日至八月二十日）

一金五圓也　東京　西山喜太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　岡山縣　岡野コキヨ殿
一金貳圓也　千葉縣　花島喜三郎殿
一金拾圓也　東京　笠川日堂殿
一金壹圓貳拾錢也　大阪　富田清子殿
一金貳圓貳拾錢也　小田原　三橋會要殿
一金四圓五拾錢也　基隆　高橋日應殿
一金貳圓貳拾錢也　名古屋　多田せ江殿
一金貳圓五拾錢也　東京　黑須源太郎殿
一金五圓也　同　北條平太郎殿
一金五圓也　同　鈴木二光殿
一金貳圓拾錢也　同　沼部彌太郎殿
一金貳圓五拾錢也　同　竹內文治殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　越山雄四郎殿
一金壹圓貳拾錢也　岡山　櫛原荒治殿
一金貳圓參拾貳錢也　上海　種村美加夫殿
一金貳圓貳拾錢也　福井縣　宮川日見殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　井上知孝殿
一金五圓也　山梨縣　原田幸八殿
一金五圓也　岩手縣　佐田すゑ殿
一金五圓也　東京　松岡ふゆ殿
一金貳圓貳拾錢也　同　川添道場殿
一金五拾圓也　同　井上道太郎殿

右難有入帳仕候也

（領收證は別に差上げませんから御諒承願ひます）

財團法人統一團

佛說觀無量壽佛經

第拾套の四

宋西域三藏畺良耶舍譯

是の如く我れ聞きき。一時、佛、王舍城耆闍崛山の中に在しき。爾の時王舍大城に一りの太子有り、阿闍世と名づく。調達惡友の教に隨順し、父王頻婆娑羅を收執し、幽閉して七重の室の內に置き、諸の羣臣を制して一りも往くことを得ざらしむ。國の大夫人を韋提希と名づく。大王を恭敬し、澡浴清淨にして酥密を以て麨に和し用つて其身に塗り、諸の瓔珞の中に葡萄の漿を盛り、密かに以て王に上つる。

守門の者、大王に白して言く、國の大夫人は身に麨密を塗り、纓絡に漿を盛り、持つて用つて王に上つる。

時に阿闍世、此の語を聞き已つて其の母を怒る。

時に韋提希、幽閉せられ已つて愁憂憔悴し、遙かに耆闍崛山に向ひ、佛の爲に禮を作して

是の言を作さく、如來世尊、在昔の時、恒に阿難を遣はし來つて我を慰問したまへり。我れ今愁憂す、世尊は威重にして見たてまつることを得るに由なし、願くば目連と尊者阿難を遣はし我と相見しめたまへと。是の語を作し已つて悲泣雨涙し、遙かに佛に向ひて禮したてまつる。未だ頭を擧げざる頃に、爾の時に、世尊、耆闍崛山に在して韋提希の心の所念を知ろしめして、卽ち大目犍連及以び阿難に敕して空より來らしめ、佛も耆闍崛山より沒して王宮に於て出でたまふ。時に韋提希禮し已つて頭を擧ぐるに世尊釋迦牟尼佛の身は紫金色にして百寶の蓮華に坐し、目連は左に侍し、阿難は右に在るを見たてまつる。

爾の時に世尊、韋提希に告げたまはく、汝今知るや不や、阿彌陀佛此を去ること遠からず、汝當に繫念して諦かに彼の國の淨業成者を觀ずべし、我れ今汝が爲めに廣く衆譬を說き、亦未來世の一切凡夫の淨業を修せんと欲する者をして、西方極樂國土に生ずることを得せしめむ。彼の國に生ぜんと欲する者は、當に三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には三歸を受持し、衆戒を具足し威儀を犯さず。三には菩提心を發こし、深く因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を勸進す。此の如き三事を名けて淨業と爲す。佛、韋提希に告げたまはく、汝今知るや不や、此の三種の業は、乃ち是れ過去、未來、現在三世諸佛の淨業の正因なり。

佛、韋提希に告げたまはく、汝及び衆生は應當に專心に念を一處に繫けて西方を想ふべし。云何が想を作さん、凡そ想を作すとは、一切衆生、生盲に非らざるよりは、有目の徒、皆日沒を見よ。當に想念を起こして正坐西向して諦かに日を觀じ、心をして堅住ならしめ、想を專にして移らず、日の沒せんと欲して狀鼓を懸けたるが如くなるを見よ、既に日を見ること已りなば、目を閉づるも目を開くも皆明了ならん。是を日想と爲し、名けて初觀と曰ふ。

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、此の事を見已りなば、次に當に佛を想ふべし。所以は何ん、諸佛如來は是れ法界身なり、遍く一切衆生の心想中に入りたまふ。是の故に汝等心に佛を想ふ時、是心卽ち是れ三十二相八十隨形好なり。是心作佛す、是心是れ佛なり。諸佛の正徧知海は心想より生ず。是の故に應當に一心に繫念して彼の佛、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀を諦觀すべし。彼の佛を想はん者は、先づ當に像を想ふべし。目を閉ぢ目を開くにも一の寶像の閻浮檀金の色の如くにして、彼の華上に坐したまへるを見よ。現身の中に於て念佛三昧を得、是の觀を作す者を名けて正觀と爲す、若し他觀せんをば名け

て邪觀と爲す。

佛身を觀ずるを以ての故に、亦た佛心を見る。諸佛心とは大慈悲是れなり。無緣の慈を以て諸の衆生を攝したまふ。此の觀を作す者は身を他世に捨てゝ諸佛の前に生じて無生忍を得ん。是の故に智者は應當に繫心して無量壽佛を諦觀すべし、無量壽佛を觀ぜん者は、一の相好より入れ。但だ眉間の白毫を觀じて極めて明了ならしめよ。

凡そ西方に生ずるに九品の人有り。上品上生とは、若し衆生有つて彼の國に生ぜんと願せば、三種の心を發して卽便ち往生す。何等をか三と爲す。一には至誠心、二には深心、三には回向發願心なり。三心を具すれば必ず彼國に生ず。復た三種の衆生有りて當に往生を得べし。何等をか三と爲す、一には慈心にして殺さず、諸の戒行を具す。二には大乘方等經典を讀誦す。三には六念を修行し回向發願して彼の佛國に生ず。此の功德を具して一日乃至七日すれば卽ち往生を得、彼の國に生ずる時、此人は精進勇猛なり。　是を上品上生の者と名づく。

上品中生とは、必ずしも方等經典を受持し讀誦せずとも、善く義趣を解し第一義に於て心驚動せず、深く因果を信じて大乘を謗ぜず、此の功德を以て回向し極樂國に生ぜんと願求す。

此の行を行ずる者は、命終らんと欲する時、阿彌陀佛、觀世音及び大勢至、無量の大衆眷屬に圍繞せれて紫金臺を持し、行者の前に至らん。是を上品中生の者と名づく。

上品下生とは亦た因果を信じ大乘を謗ぜず、但だ無上道心を發す。此の功德を以て回向し極樂國に生ぜんと願求す。彼の行者命終らんと欲する時。阿彌陀佛來つて此人を迎へたまふ。

中品上生とは、若し衆生有つて五戒を受持し八戒齋を持し、諸戒を修行して五逆を造らず、衆の過惡なし。此の善根を以て回向し西方極樂世界に生ぜんと願求す。

中品中生とは、若し衆生有つて若しは一日一夜八戒齋を持し、若しは一日一夜沙彌戒を持し、若しは一日一夜具足戒を持し、威儀に缺くること無し。此の功德を回向して極樂國に生ぜんと願求す。戒香熏修せる此の如し。

中品下生とは、若し善男子善女人有つて父母に孝養し、世の仁義を行ず、此の人命終らんと欲する時、善知識其が爲めに廣く阿彌陀佛の國土の樂事を說き、亦た法藏比丘の四十八大願を說くに遇はん。此の事を聞き已つて尋いで卽ち命終す。

下品上生とは、或は衆生有つて衆の惡業を作る。方等經典を誹謗せずと雖も、此の如き愚

人多く惡法を造りて慚愧有ること無し、命終らんと欲する時、善知識爲めに大乘十二部經の首題の名字を讃むるに遇はん。是の如き諸經の名を聞くを以ての故に、千劫の極重の惡業を除却す、智者復た教へて合掌叉手して、南無阿彌陀佛と稱へしむ。

下品中生とは、或は衆生有つて五戒、八戒及び具足戒を毀犯す。此の如き愚人、僧祇物を偸み、現前の僧物を盜み、不淨に說法して慚愧有ること無く、諸の惡法を以て自ら莊嚴す。此の如き罪人は惡業を以ての故に應に地獄に墮すべし。命終らんと欲する時、地獄の衆火一時に俱に至る。善知識の大慈悲を以て卽ち爲めに阿彌陀佛の十力威德を讃說し、廣く彼の佛の光明神力を讃め、亦た戒定慧、解脫、解脫知見を讃むるに遇はん。

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、下品下生とは、或は衆生有つて不善業を作り五逆十惡、諸の不善を具せん。此の如き愚人、惡業を以ての故に應に惡道に墮し、多劫を經歷して苦を受くること窮り無かるべし。此の如き愚人、命終の時に臨み、善知識の種種に安慰して爲めに妙法を說き教へて念佛せしむるに遇はん。彼の人苦に逼られて佛を念ずるに遑あらず。善友告げて言く、汝若し彼の佛を念ずること能はずば、應に歸命無量壽佛と稱すべし。是の如く至心に聲をして絕たざらしめ、十念を具足して南無阿彌陀佛と稱せん。佛名を稱するが故に念念の中に於て八十億劫の生死の罪を除く。命終の時、金蓮華の猶ほ日輪の如くにして其の人の前に住するを見ん。一念の頃の如くに卽ち極樂世界に往生するを得蓮華の中に於て十二大劫を滿じて蓮華方に開き、觀世音と大勢至と大悲の音聲を以て卽ち其の人の爲めに廣く實相、除滅罪の法を說かん。聞き已つて歡喜し、時に應じて卽ち菩提の心を發す。是を下品下生の者と名づく。是を下輩生想と名づけ第十六の觀と名づく。

佛說觀無量壽佛經　畢

稱讃淨土佛攝受經

第拾套の四

大唐三藏法師玄奘奉　詔譯

是の如く我れ聞きき。一時、薄伽梵、室羅筏に在して誓多林の給孤獨園に住したまひき。爾の時に、世尊、舍利子に告げたまはく、汝今知るや、不や。是より西方此の世界を去ること、百千俱胝那庾多佛の土を過ぎて、佛の世界有り、名を極樂と曰ふ。其の中の世尊を無量壽及無量光如來、應正等覺と名づけ十號圓滿せり。

舍利子よ、無量壽佛、阿耨多羅三藐三菩提を證得してより已來十大劫を經たり。

稱讃淨土佛攝受經　畢

本多日生上人著書特價提供

聖語錄　改版　特價　金壹圓八拾錢
法華經要義　賜天覽　送料共　金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓　〃　金壹圓五拾錢
日蓮主義精要　〃　金貳圓九拾錢
眞理の基礎に樹つ佛教の信仰　〃　金　拾五錢
法華經要品　〃　金　五拾錢
日生上人レコード（四面）　〃　金參圓廿五錢
日蓮聖人　〃　金　拾錢
本尊意識に就て　〃　金　貳拾錢
釋尊の八相成道　〃　金　貳拾錢
法華經の心髓　〃　金壹圓五拾錢

禮記講事講錄　特價　金壹圓七拾錢
本多日生上人　送料共
勤行作法　〃　金　拾錢
佛教の心髓　〃　金壹圓
河合陟明著　定價
皇道と日蓮主義　送料共　金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ十七
財團法人　統一團出版部
振替東京九四二〇番

統一定價
一冊　金貳拾錢　送料壹錢
半ヶ年　金壹圓貳拾錢
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共

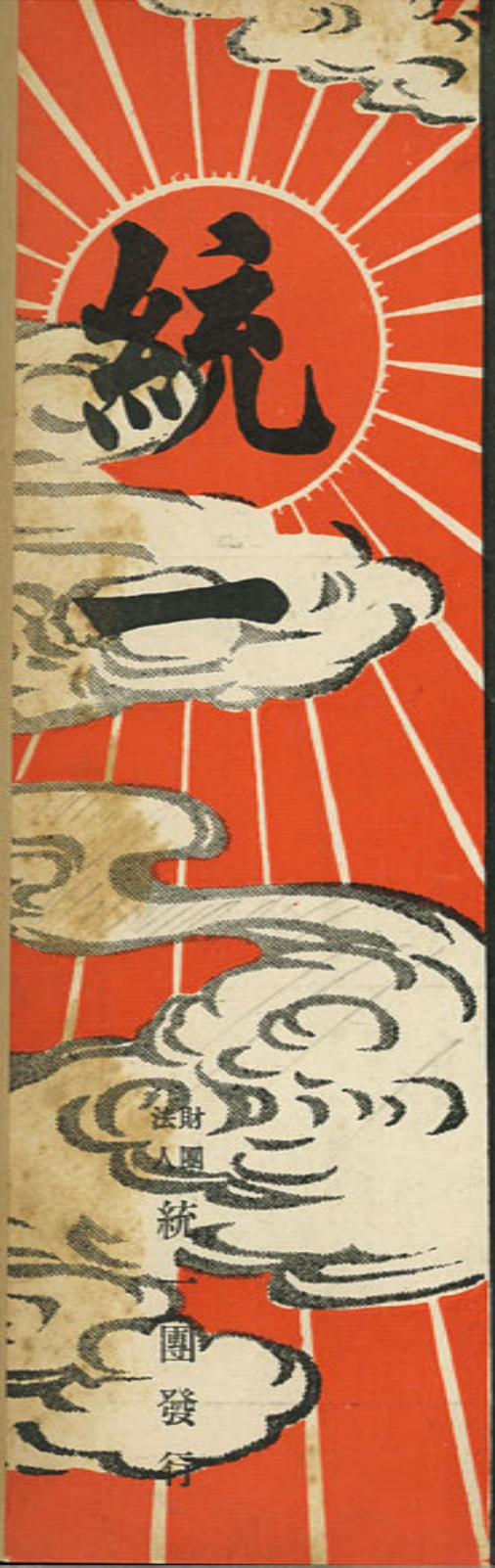
注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十四年八月二十七日印刷納本
昭和十四年九月一日發行
（第五百三十四號）

東京市小石川區音羽町六ノ十七
編輯兼發行人　磯部滿事
東京市四谷區內藤町一
印刷人　山田英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所　野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ十七
發行所　財團法人　統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



目次

佛教の根本と其の應用（其十四）……本多日生
開目鈔講話（承前）……小林一郎
經濟界の今日及將來……上田辰卯
國民精神指導としての佛教……磯部滿事
記事
○本部團報　○立正青年團報　○福島支部報
○團費誌料寄附金及維持費領收
大藏經要義續篇（其十八）……本多日生

第四十四年十月號

14/10.173